

浄土

四月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受承認第三五二号）
昭和三十七年三月二十五日 印刷 昭和三十七年四月一日発行

第二十八卷

第四号

浄土宗聖典

定価 送料
一、三〇〇 一二〇

法然上人研究

仏教大学編 一、〇〇〇 一二〇

親鸞と法然

高千穂徹乗著 一八〇 四〇

一遍上人法語集

武田賢善編 三八〇 八〇

法然上人御一代記

大富秀賢著 一〇〇 五〇

元祖法然上人御法語

折本 二五 一〇

京都市下京区（中央局区内）

上珠数屋町烏丸東入

仏教書林 西村為法館

電話 〇三 三三三八番

振替 京都五六四八番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
（百部以上五分引送料無料）

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

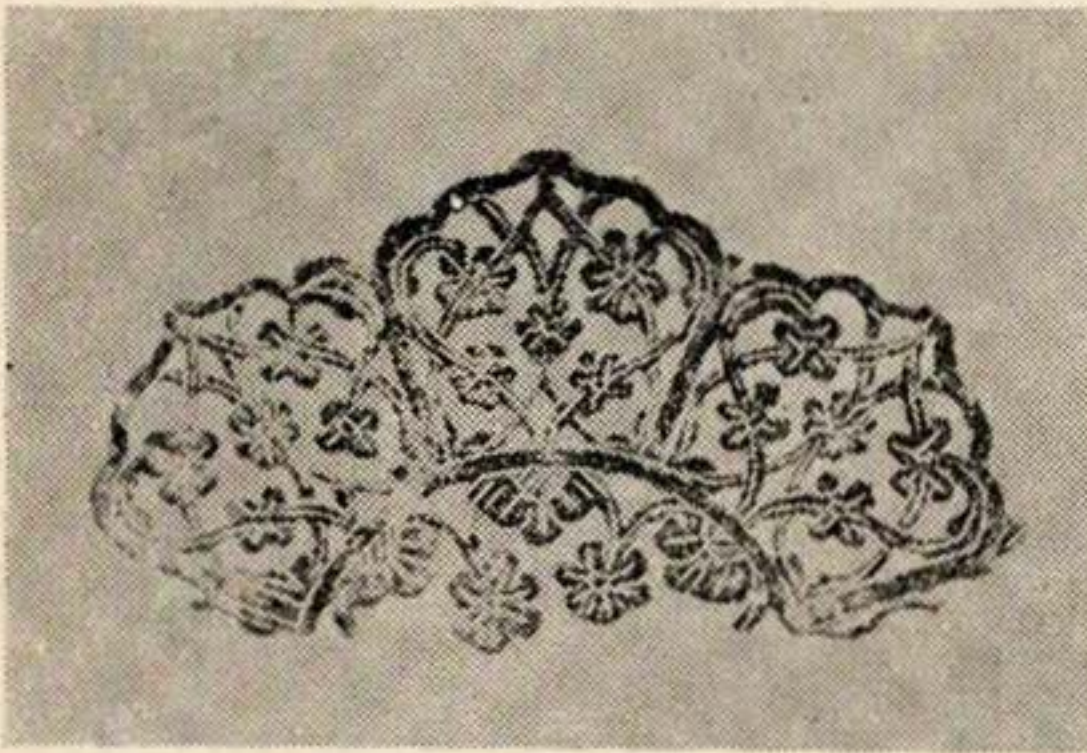
振替東京八二一八七番

浄土

四月号

浄土一宗の、諸宗に越え、念仏一行の、諸行にすぐれたりといふ事は、万機を撰するかたを言ふなり。

法然上人御法語



中央アジア・トルファン（高昌）の古寺院跡で発見された、真鍮製の花と蔓草模様の荘飾品。

浄土 四月号 目次

表紙……………誕生仏（奈良 東大寺）

世尊、世に生まれましぬ……………佐藤良智……………（六）

インドと虎のこと（下）……………春日井真也……………（八）

太子と十七条憲法…………………………（三三）

随筆 草聖・懷素……………中村素堂……………（二）

中国綺談 継母の研修記……………牧尾良海……………（一八）

近代高僧伝 宮沢説音……………大橋俊雄……………（二三）

小説 お酉さま……………一瀬直行……………（二四）

童話 ツトム君と自転車……………みなくちまさひろ……………（二四）

実話 帰還列車の旅……………吉野翠幹……………（二八）

上人の御誕生……………（三七） 童心仏心……………（二六）

嫁と姑との争い……………（三） 屏の御法語……………（二七）

小善を積む……………（一九） 表紙の写真……………（四〇）

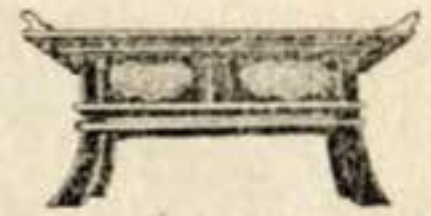
息は身の垢……………（五）

聖典 講義 サシミ念仏……………竹中信常……………（三四）

隨筆

草聖・懷素

中村素堂



いまから千二百年余り前の唐の天子は有名な玄宗皇帝で、聰明でいろいろな芸ごとの好きな天子であつたが、芸ごとの余暇に政治を見る様になると、安祿山の謀つた内乱のために、国を危うくしたりした。

皇帝自身は国外に亡命したり、遂に位を失つたりしたが、しかしこの時代は唐代でも芸術の爛熟した一時期で、どの方面にも逸話をのこす様な人物が輩出した。この時代に活躍して唐詩選などに、その傑作をのこしている詩人錢起の從甥に懷素という坊さんがいた。

この一門から、文墨の著名人は沢山出てはいない様であるが、懷素（世間では、かいそというが、河井荃盧先生はゑそと読むべきだと云われた）という人は、中国の書道史上に不朽の名作をのこし、今日まだまだその影響の大きい大家である。

この人は、支那人名辞典などによると、俗姓が范氏で玄

昇に從つて学び、のちに専ら律部を修めて一家をなした高僧で、天子の命で西太原寺に住して、開四部律記とか俱舍論疏だとか七、八種の著書をのこして七十四才で示寂したと書いてあるが、どうも之は大分嘘らしい。

陸羽の唐僧懷素伝という本によると幼少から仏書を読み余暇に書を精習したが、大家の真蹟を見たいために、方々を歴訪して名家に会い豁然として草書の秘訣を悟つたとあり之を転載した東洋歴史大辞典その他にも、そう書いてあるが、これには俗姓の記載はなく歿年もない。しかし前者は仏典に関する研究が主になつて居り、後者は書道の研鑽が主として記されている。

京都の市立美術大学の中田勇次郎教授が、平凡社の書道全集に解説したのを見ると、俗姓は錢氏で、開元二十五年に生れて六十一から六十三年の間で歿したとしてあり、仏道の余暇、生来の嗜好であつた書道には随分専念した様に

記してある。中田教授のこの方面の御研究は定評のあるもので、錢起の一族で俗姓が錢氏など当然のことが、人名辭典には范とあったりして、大分明瞭を欠く点があるけれど、いろいろの本にある逸話の断片を綜合してみると、随分奇行もあり又精魂をこめたらしい研究の姿も知られて、今日にまで光を投げている傑作の作者であることがうなずかれるのである。

むずかしい考証みたいなことは措いて、私はこの僧門出身の書道の大家が、その不滅の名を伝えている幾つかの作品中、絹本の巻物である草書千字文、一字一金の価値があるというので、世に千金帖という通称をもって喧伝している一巻の真蹟を、昭和十年の十一月虎の門の晩翠軒樓上に披見して、これが神品というものだと、魂を吸いよせられる様にほれぼれとながめ入った。

今でもまざまざと思い出されるのであるが、その席上には、今度芸術院会員に推された川村驥山翁が居って、大きな声で感嘆の言葉を饒舌って居られ、中村不折翁は立ったり座ったりして、遠近から見て居られ、河井荃廬翁、野本白雲氏などは黙々と見つめているし、その一番はずれに中国の錢瘦鉄先生が、片ことの日本語を混せて何か説明されていた。

爾来私は草書の筆法は全くこの千金帖一辺倒で七、八年をすごし、その後又王羲之などのものに戻ったくらい惚れてしまった。そして懷素がこの緯々として、線のないところにも余情が流れている様な、呼吸の深い静かな氣品を持つ、神品一千字成立の秘訣を知りたいと、その関係のものをあかず探していた。

家が貧しくて紙がなかったために、庭に芭蕉を植えて紙の代りに使ったとか、板に漆を塗って紙の代用として、書いては消し書いては消していたが、その板が磨り減ってしまったとか、衣服から器具、壁、戸、障屏の類まで、手のふれるものに悉く文字を書いて、周囲の者もこれは少し頭がいかれていたのではないかとさえ思ったとか云う有名な幾つかの逸話、こんな逸話も、その書法の最初の伝授者であるいとこの鄔某は、張嶺といわれた変り者の草書の大家張旭の法を伝えたというから、この草聖張旭の逸話とも類似し、ある部分は混同しているのではないかなども考えていた。

これはこの張旭が酔うと奇声を発して街を馳け歩いたり、頭髮に墨をつけて一気に草書を書きなぐった等という話を聞いていると、懷素の若い時代の字が、驚蛇の様に流れて連綿し、筆勢も相当はげしいものがある点、大分共通

している書風から想到して、張の筆法が鄔を繼て懷素に伝授されたことは信じられるし、その逸話の類型もありそうなことだとも思っていた。

ただ懷素はさすがに僧門の人で、その使えなくなった禿筆を山下に埋めて祀り、筆塚と名づけたなどという、床しい話が酒狂の様な話の間に散見している。

名人のこの種の逸話は、少しずつ形を変えていろいろなものにあり、どうもあの清寂な晩年の境地に到達する説明としてはピンとこないものばかりであった。

ところが、年来私の趣味の一つとして大分蒐集してきた宮内庁楽部の雅楽のレコードで、最近買ったLP盤の剣気禪脱（けんきこだつ）というのを聴きながらその解説を読むと、

『唐代の草書の大家、懷素は王女の舞った剣気禪脱を見る機会を得た。と、彼は靈感に充たされ、筆法が一変して素晴らしいものになったと云う話が伝わっている。』

と書いてある。私は実に驚いた。早速また、これをかけてしみじみ聴きなおして見た。これはヒチリキの主奏に、羯鼓が美しいアヤを作る唐渡来の左方楽で、管楽器ののびやかな音を羯鼓と絃で引きしめて、まことに霓裳（げいしやう）をひるがえして舞うのを見る様な閑雅な美しい古楽である。

ある。

奈良の薬師寺の東塔の美しさを、凍れる音楽であると絶讃することは、美術界の有名な通り言葉である。私はこの言葉をそのまま借りて懷素の草書は即ち唐楽の剣気禪脱を形として表わしたものだといいたい位であった。

作り話にしても、この伝説はいかにもピンとくるものを感じた。懷素が極めきたり極め去って、狂気と見られる程の努力のはてに、信仰の深い人が仏を念じ念じている内にふと仏を感得する様に、或は禪者が放身捨命底の修禪裡、ふと見た一挙手の如きものに大悟をするという様な、この雅楽に魅了されていたある瞬間に、自ら感激して、草書三昧を把握したと云っている様な事実があったのであらうと思うのである。

下手は下手なりに、私どもの様なものでもポコンと壁の抜けた様な、判り方がして、急に書きよくなる時があるのを考えると、禪者の悟りなどという言葉を十分に肯定できる気持もするので、この話は恐らく、懷素の中年の颯爽たるはげしい作品類と、晩年に近く清閑の気品の溢れた作品との間にあった事実ではないかと、想像され、またその様に想像することによって、この一人の懷素の全く別人の様な後年の到達境を理解することもできる様に思うのである。

る。

そして私は、六十余年の今日までに存じ上げて有難く見まもってきた、二、三の高僧の挙措の中にも、何か似かよふものを見出して、人間何をやっても、生涯行を修する様なものだという感を深くするのである。

ところでこの雅楽による書法大悟の話は、余り簡単に承

諾して話をまとめてしまった感があるが、実はこの話題の出典や何かをもっと精細に調べて、千金帖の書線の性格と考え合せて見たいと思ったが、雑用の時間ばかり経って、編輯の方から三度の御催促を蒙った始末。これ以上はと考え、先入感のままに一人ぎめをしていることは、聯か恐縮の感もするのである。

怠は身の垢

経があっても読まなければ経の垢、家があっても破れてつくろいをしなければ家の垢怠ることは身の垢である。

あるが、門口に立つ物貰にはいろいろの種類の中に工夫があり、努力があり、経験を重ねがある。働けば立派に働けそうな身体をしているので、「お金をあげるから、庭の掃除をしてくれ」というと、そんな若い者に限って図太く黙って帰ってしまう。

目の前に万卷の経を積んでおいても、読む人がなければに等しい。というよりも経

人によって才能に恵れているかいないかは止むを得ないことであるし、楽しい生活を送るための根本問題でない。心から誠意を以て努力するものにとっては、持って生れた才能をあてにしないで済む場合が多い。

に、読まれなければ、経文が嘆く筈である。

それに反して一度怠惰が身につくと、全く大人の目からみると愚連隊は世の中の垢のよ

雨もりのする家にすんで、修理をしようとならない者に豊かな明るい生活のあるわけがない。これらは皆怠けるからであり、怠け心こそ人の世の敵である。

手におえぬものとなる。この怠け癖は大ていの場合には青年になるまでの幼い頃に誤って身につけることが多い。少年時代は遊ぶのが商売だから、思いきり遊ぶ方がよい。その遊び

乞食を三日すると止められないという諺が

はならぬ。



世尊、世に生まれましぬ

佐藤良智

ぶつ、世尊は今から二千余年前（西紀前五六五年）いんどのかびら城外のるんびに、園に花咲き香う四月八日降誕し給うた。母君はまや夫人であります。国王浄飯王のおんきさきであります。王子さまとして生まれましたのであります。

あそか（無憂樹）の花の紅に包まれて生れました世尊は、はだかのまま七歩あゆみ、手を天と地に指して、「天上天下唯我独尊」とさげばれたといひます。

世尊がどのように偉くても生れてすぐ七歩歩まれる筈がありません。それは伝記作者のたとえです。後世の信者の信念です。世尊のみ教えでは、人間は、地獄、がき、畜生、阿修羅、人間、天などの六つの道をさまよい歩いて限りが無いと説かれます。一々説明しま

大切なことは、七歩をあゆまれた世尊のことばであるということです。真の自由人のことばです。宇宙と一つになられた方のことばです。

ここにさげばれた「わたし」は、相対的な、「わたし」ではありません。絶対の世界の「わたし」であります。あなた、わたし「の小さい「私」ではありません。」「小我」ではなくて、宇宙と一つになった「大我」であります。大きな、大きな「わたし」なのです。あなたも、そして、あなたも、わたしも、すべてうちにつつんだわたしであります。もともとは無い、小さな「わたし」の、からのなかに腕をはっているから地獄の苦しみ、餓鬼のなげき、畜生のあさましさ、修羅のみにくさ、人間のはかなさ、天上のうつろさに悩みになやむのです。それらの六つの道から解かれ脱せられた世尊は尊い。宇宙と一つである「大我」である「わたし」は尊い。それが尊いと世尊はさげばれたのです。この世尊の声は宇宙の声なのであります。よく、天の声など申しますがこれこそ天の声なのです。み仏の声なのであります。この声を聞く

ものは仕合せであります。この声を自ら発するものは仕合せであります。尊く尊い。世にも尊い。

世尊とはいみじくも申されたことばであります。

ここで世尊等のおしゃかさまの別の名前について一寸ふれておきたい。これを仏の十号など申します。実際には十一になります。その一々がまことにみ仏の御徳をよくあらわして居ります。

如来(によらい)。仏さまは、真如即ち真理からやってこられた方です。まことの世界からこの六道のうそいつわりの世界にやってこられました。みなものを救わずにはおかないとやって来られた方です。

応供(おうぐ)。らかなさまとも申します。

供養に応ずるねうちのあるという意味であります。私どもは何の気なしに三度のごはんを頂いて居りますが、本当にいただく価値がありましょうか。深く思いをいたせばまことに恥かしい限りであります。仏こそは、このねうちのある方です。その故にこのみ名があります。

正遍知(しょうへんち)。かたよった知ほど恐ろしいものはありません。『等正覚』とも言い、この世の真実を正しく知ること、仏法にあっては、この世の苦しいこと、その苦が迷いから来ること、その迷ひを道によって切り開きさとりに至ること、この理を正しく理解されたのが世尊であります。

明行足(みようぎようそく)。心の眼が明るく、あらゆるものを明かに見透し、行為に言葉に欠けるところがない。それが、世尊であります。

善逝(ぜんぜ)。世尊は心深く、かぎりない智慧をもつて善きことを説き給ふて去った方です。

世間解(せけんげ)。世間を本当にわかった方。それが世尊であった。雲の上のこと、かすみの向うのことを専らにする方ではなかったのであります。ものわりのいいおじさんをおぼすよいお名前。世尊にふさわしいお名前です。

無上士(むじょうし)。世尊は気高き方でありました。

調御丈夫(じょうごじょうぶ)。世尊はど

のようなあらくれ男も、よきことば、せつなきことばをもつてこれを教化して、まことの道に入らしめた方です。その故にこの名があります。

天人師(てんにんし)。人の師たることはまことに難いこととあります。世に師と名付ける者は多くありますが、まことに師となっていることでしょうか。よきをすすめ、あしきをのぞき、なやみを解く人の師で世尊はしましたのであります。

仏(ぶつ)。世尊は、自らめざめ、他の人をしてめざましめ、行いまどかに、あらゆるものをよく見知りたもうた方でありました。ほとけとはこのような方をいうのであります。ほとけさまのようなひとと人をいささか軽くみて言うことばではありません。深く重い方です。

世尊、世に尊い方の故にせ、そんと言ふ。有難き哉。四月八日に世に尊い方が生れました。人類はあらんかぎりこの尊きものに導かれて行くでしょう。

そしてこよなき仕合せを得ることとでありましょう。



インドと虎のこと(下)

春日井 真也

二、虎と歴史

エリザベス女王一行のインド公式訪問の期間のある一日が虎狩りの清遊であった。その日のお供をした人のうちに、ここ三十年間に一千頭の虎を射ったという名人が加えられていたという。インドには各地に虎狩りの名人という人がいるから、この調子でここ半世紀の間に、インド各地・アジア各地で虎が射たれているわけであるが、それでもまだまだ多数いるのであるから、その総数たるや大へんなものになるであろう。もとより虎は猛獣なのであるから、人間には害をなした害である。また現に幾多の害を人間に与えている。しかしインド人と虎との関係は害か益かという様な切実な問題で最初に意識せられたものではなくて、何かもつとノンビリしたもので

結合させられている様な気がする。

インド半島のつけ根にあたることを、西側の大陸と境して流れるインダス河下流に発見されているモヘンジョ・ダロの遺跡及びその北方にあるハラッパーの遺跡は、西紀前五〇〇年—前二〇〇〇年の古代遺跡と見られている。そこからは世界最初の釉をかけた陶器が出ているほか、未だ解説せられていない二〇〇字あまりの種類のインダス文字を彫り込んだ多数の印章を出しているので有名である。この印章は何の目的のものか判然とはしていないが、その中に虎が牛や象や神像と思われるものと同じ位置に表わされている。この遺跡からは家畜としてコブウシ・角の短いウシ・スイギュウ・ヤギ・ヒツジ・ブタ・イヌ・単峰ラクダ・ゾウそしてネコがいたこ

とが知られるから、虎は我々が考えるよりももっと人間社会に近いものとして理解せられていたにちがいない。

その次に現在インド共和国政府の国章として用いられる四頭のライオンが背中合せに飾盤の上に坐った彫刻について考えねばならない。これは今から二二〇〇余年程前、はじめて全インドを統一統治したマウルヤ帝国の大皇帝アシヨールカ王がベナレスの北方にある仏陀初転法輪の聖地サルナートに建立した法勅石柱の柱頭にあつたものである。

第七世紀のはじめこの地を巡礼した玄奘三蔵(西紀六〇〇—六六四年)は、この石柱を見て、

「高さ七十余尺の石柱あり、石面磨かれて玉の如き光沢あり、心をこめて祈願すれば、諸々の影像を現じ、善悪の精神状態を石面に映ず、是れ仏陀成道の後はじめて法を説きし処なり。云々」

と旅行記の中に述べている。この柱頭はいつの間にか土に埋もれ忘れ去られていたが、一九〇四年に再び土中から発掘されて地上にもたらされた。今はサルナートの博物館の中に

陳列せられているが、今なお出来たての様な、新鮮な光沢をもっていて深い感銘をうける傑作である。

このインド国章のライオンが既に幾らかの図式化しているところから、その時代に早くもインド、ライオンは減少傾向をとり出していたのではないかと言われている。インド・ライオンは今では、西インドのカチャール半島地区に僅か二五〇頭しか生き残っていないと言われている。このインド・ライオンはもとインド全域に広く住んでいたのであるが、虎に追われて、次第に少くなったと言われている。人間の側からライオンと虎とを較べて見ると、虎のもっているその派手な美しい縞模様は動物のものと思われたい何か高貴な感を起させるものをもっているから、虎の方がライオンより余計に人間に射たれて、数が減少しきうなものである。ところがライオンの方が減っているのであるから、そこに何か特別な理由がなければならぬ。もとより虎の世界の歴史は書かれているわけでないから、虎そのものの側からは知ることが出来ない。けれどもライオンとならんで猛獣として

虎が人間の社会に与えた大きな怖畏の感情は、今も皆も消すことの出来ぬ大きなものであったからして、インド史の随所に虎とライオンの資料が出てくることになる。

インド文化史研究の一つのバックボーンとなっているものにヌミズマティクスと云われている古銭学がある。インドに限って見てもインドに入って来た外国古銭が沢山ある。古く西紀前五―四世紀のベルシャのアケメニド王朝の金貨・銀貨をはじめ、梟の彫刻によって特色のあるアテネコイン、鷲の浮彫のあるマケドニヤ古銭などが、アレクサンドロス大王（西紀前三五―三二三年）のインド侵襲を機会として流入し、これを機会にして東西文化の交流が一段と活潑になるわけである。従って西方文化は、インド在来の文化と結合して種々の変化を示すことになる。

西紀前二〇〇年頃にインド内地であるパンジャブにギリシャ人王国を建設したデメトリウスの古銭には、象首の王冠を戴いた自らの肖像を浮彫にした銀貨がある。この王はインドの西方にあって常にインドをねらっていたシリアのアンティオクス三世の王女と婚約

し、自ら象首の王冠を用いて、インド文物を誇示しているところは、ギリシャ文化とインド文化との融合のプロセスを極めて象徴的に表わしている。この銀貨は裏面にギリシャ神話の英雄ヘラクレスが正面を向いて立ち、右手で王冠をかぶり、左手にライオンの毛皮をかけて棍棒をもち、その両側に一行ずつに分けて *Bazilews Demetrio* と刻んでいる。

デメトリウスのコインの他のものには、立てるアルテミスを出している。この神はギリシャ神話では、アポロの双生の妹であり、野獣・家畜の保護者とされている。そのコインの表面のデメトリウスの肖像は月桂樹の冠をかぶり、棍棒を肩におき、首にライオンの毛皮をまとうて表わされている。

この一連の古銭のデザインの意味する意図を見ると、捕えることが難かしいライオンを毛皮化すること、力のすぐれた英雄的シンボルとなしたのであろう。

このような意図が、後になって西紀第一―二世紀頃に入ってカプールを統治したカドフィセス王二世の金貨の頃になると、ギリシャ神話のヘラクレスが後退して、インド神話の

シバ神にかわって来ると同時に、ライオンの毛皮が虎の毛皮にかわってくることになる。

このあとクシャーノ・ササーニアン・コインには沢山のシバ神の例が出てくる。またその時代のものになると牛が出てくる。

インド・ファリオグラフィ（インド古字学）はドイツのビューラー教授によって大成されたことになっている。それは西紀前三五〇年より西紀一三〇〇年頃までの資料をもって考究され、ドイツ語版が一八九六年に英訳版が一九〇四年に出版されている。このあと多くの新しい事実が解明せられて居るけれども、日本に伝わっている悉曇学の資料から、インド古字学を再び研究したものとしては、昭和十九年（一九四四年）に出版された田久保周普氏の『批判悉曇学』があるだけである。しかしこれとても具体的資料について論じていないから、文献の網羅に止まり、ビューラー教授の体系を更新するところに至っていないことはまことに惜しいことである。

虎を追っているうちに一寸わき道にそれてしまったわけであるが、インド文化史のうえに虎とライオンが交代してゆくことは単にお

もしろいことだけではなしに極めて重要な意味を文化史的になっていることになる。

三、虎の文学

虎はインドに於て、インド・ライオンを駆逐して、各地に棲息しているわけであるが、はじめに見た様に、虎はアジア大陸の各地に住んでいる。もとより昔はもっと沢山住んでいたにちがいない。

シナ文学に出る「虎嘯風生」といい「虎視眈眈」という様な表現は、猛獣が山野を圧して荒れるおそろしさを観察したものであるが、この観察の経験をシナ史の編者は人間社会の事実を伝える場合に用いて、大きな効果を挙げている。「虎穴に入らずば虎兇を得ず」とか、「虎を養いて患をのこす」、「虎のために翼をつく」、「虎を野に放つ」などという様な表現は、シナの歴史家、思想家の独特の考え方の型となっている。またシナの皇帝の用いる六種の印璽のつまみに虎のかたちが彫まれているということは、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスがライオンの毛皮を誇示することと同じ様に、虎が特権者のシンボルとさ

れていたと考えてよいことになるであろう。インドの文学に於ては、美しいライオンと鋭い牙をもった虎との間に、両舌をもって処世する野狐の寓話がある。

また虎の皮をかぶったロバの話も面白い。だまっていたうちは無事だったが、例の独特の叫声を挙げたとたんにバケの皮がはげる話である。虎のことはサンスクリット語ではヴァーグフラというのであるから、ひよっとすると、このヴァーグフラがなまって直接にバケの皮のバケにかわったのかも知れない。

「獅子身中の虫」という言葉は、梵網菩薩戒經に出てくる有名な言葉で、「自ら獅子の肉を食て余外の虫に非ざるが如し」と云われる。このことは獅子であっても、虎であっても同様と見るべきであるから、インドではライオンや虎はやはり何かの目的のため飼養せられていて、従ってライオンや虎のための生理学病理学的知見が集積せられていたのである。

こういうところから結論せられるインドの虎は極めて食欲旺盛で、食欲地がはっていたらしい。

インドに大乘仏教文学が起る西紀前後より少し前に書かれたと思われる文献のうちに、ライオンが食べのこした獲ものの肉は見つけた人がもらってもいいが虎の食べのこした獲ものは骨といえども、決して触れてはならないと言われている話を伝えている。虎はこのように、ライオンの鷹揚さに比べると、ガメツクで、動物社会の生存のルールよりもむしろ人間社会の生存競争のルールに近いものをもっていたらしい。この生活力の逞しさが、虎をもつてもとは全インドに住んでいたと思われるライオンを駆逐して、虎をインド各地にはびこらしめる理由になったのであろうか。

この食慾の逞しい代表選手は、また奈良法隆寺に伝わっている玉虫厨子に描かれている。

そこでは捨身餓虎とされていて、食慾そのものが表面に出ている。しかしこの捨身餓虎の説話それ自体はいま云った様な理由からして、日本人に深い感銘を与えるよりも、更に深くはげしくインド人の心に感銘せしめた偉大な文学作品であることを思わざるを得ないのである。またこの説話を描いた漆絵その

ものが、もはや技術の相伝を日本には失ってしまった密陀僧を用いる古い油絵なのであるから、その技術がかつて広く用いられた中近東の人たちにも深い感銘を与えたことを察することは困難ではない。

ところで日本語の中に用いられる「虎の子」という言葉は、日本の感覚の上で云えば「貴重な」とか「大切な」とかいう意味に用いられているのであるから、それを直接に英語にして「虎の子」と訳して見ても意味は通じない。またこの場合を英語の方で云う *The apple of the eye* を「眼の中の林檎」などと日本語に直訳してもピンと来るものがない。文化交流という様な言葉が、軽々と口にされるけれども、決して簡単な物理学的な作用・反作用の関係ではないからである。

日本には幸か不幸か、虎もライオンも住んでいなかったのも、そのおそろしさは、口でも文章でも仲々云い表わすことは難しかったらしい。また古い時代には猫すらも日本にはいなかったから、全く虎は想像を絶してい

たらしい。

鮮の百済に使した膳臣巴提便が任地に於て子供を虎にさらわれた話がある。彼は翌朝、雪の中を足跡をたよりに追いかけて、虎に出会うのである。そのところの記述を日本書紀巻第十九に見ると、次の様になっている。

『其の虎、前に進みて口を開きて食わんとす。巴提便すみやかに、左手をのばして其の虎の舌を執りて、右手に抜きてもちたる刀をもつて刺して殺し、皮をはぎとりてかえる』この記事から知られていることは、虎は全く牛か馬と同じ様にしか理解せられていないことである。従って豪勇ならぶことのない巴提便の果敢な行動はちっとも生きて書かれていない。この文章が日本に知られた虎という動物の最初の記事である。猫が日本人に知られるのは宇多天皇（西紀八六七—九三一年）の日記である宇多天皇御記であって元慶八年（西紀八八四）、光孝天皇のとき、唐土から送られてきた黒猫を天皇が非常にかわいがられたことが書かれている。また清少納言の枕草子によれば一条天皇も、高麗から献上された猫を愛されたことが伝えられている。

（文学博士・ビスバ・ブハラティ大学教授）

近代高僧伝

宮沢説音



大橋俊雄

宮川と六斗川によってつくられた三角州——諏訪湖にほど近い豊田村文出に、説音が笠原彦五郎の四男として生れたのは文久元年九月のことであつた。家は代々庄屋をつとめた土地の旧家で、一族の中からは曼茶羅僧正といわれた獅子頭菩薩、卓中立禅和上をだしたほど熱心な信仰あつた家庭であつたから、幼少の頃から何くれとなく仏教にあこがれ、寺院生活を夢みていた彼は、親の許しをえて明治七年四月十四歳のとき上諏訪正願寺の念誓説岸について剃髪し、名を説音と改めた。そして仏者としてはすかしくないよう修行し学問をし、立禅のような立派な人になりたいと考

え、又家族の者たちもこのように念じていた。正願寺は諏訪地方きつての肉山であり、信州は殊更教育には熱心な土地であつたから、学問を好む向学の念にもえた此の少年の志をいれて上京させることに異論はなく、寧ろ当然のこととして彼をめぐる人達は、この行を壮とし同十一年出京することになった。上京した彼は増上寺山内の照道寮に入り、次いで本郷丸山町にあつた共慣義塾に移った。義塾は神原精二翁の開いたもので、翁は大内青巒等と共に明治維新の排仏毀釈という法難にあり、仏教界が大混乱におちいった時全国を行脚し、仏教の興隆を念願して国民に自覚をう

ながし警醒の鐘をうちならしたほどの人であつたから、彼の塾もまた仏教の精神にのつとつて創設したものであつたことはいうまでもなく、説音はここに居ること七カ月、同十二年八月には増上寺山内の妙定院に掛錫することになった。

時の妙定院主は宗学に長じた好譽在舜であり、山内浄運院には安井息軒の上足といはれた久保田精一が住んでいた。久保田は成蔭舎という学舎を設けて漢学を講じ、その名四方に及んでいたので彼の名声をしたつて講筵につらなるものも多かった。その頃在舜には賢定という弟子がおり、説音とは四つちがいの年少で共に好学の士であつたから、二人は常にうまがあい、在舜については宗余乗を、久保田には漢学をまなんだ。賢定はのちに第一教校長や芝中学校長として宗門の教育につくした松濤賢定であり、説音はその後東部大学林に学び、和歌は天光院の観堂に師事し、又浅草日輪寺の正山実辨について起信論や華嚴をまなぶなどして大いに学問を究め、同十七年十月推されて大学林の助教授になつたけれども在職僅か二年にして帰省し、二十一年二

月正願寺の住職となった。説音にとって学問を志した所以のものは自己の学殖をますことではあるが、これをあくまで自己のものとして吸収するとともに仏教の何たるものであるかということも多くの人たちに知らしめ、信仰を増長させることこそ急務であると思つていた。大学林を僅か二年で辞し故山に帰つたというのもこれが原因であつた。

正願寺に入つてからの説音はことあるごとに法を説いた。そして請われるがままに各地に法雷をふるつたけれども、彼は老少男女誰にでもわかるように良くかみくだいて、しかも手近かなことを例にあげて教を説いたので、彼の法演の場には常に人々がみちあふれて聞く者をして耳をそばだてさせたという。そして念仏をといてまわつたが、平生の修養については

「何時死に出会つてもまごつかないだけの用心が平生のうちから、ちゃんときまつていることが、どなたにとつても一番大切ですよ」と述べ、又

「わしは平生紙一枚、水引一本でも粗末にせぬように心がけているが、幸いに物に不足

を感じたことはない。一体物を粗末にすることは徳分を失うことであつて、必らず行きつまりを感じるものである。此節皆が口を開けば行きつまりだといわれるが、多くは自業自得であつて物を大切にとりあつかわなかつた罰であると思う」

といつては何事でも粗末にあつかうことは良くないことだとねんごろに教えた。

生家は庄屋をもつとめた家であつたから、壮年の頃までは絹を身にまとい綿服に手を通したことはなかつたが、弟子をとり教養にあたつては綿服を用いなければ本当の教育はできないと固く心に誓ひ、断然絹衣をやめると共に弟子の教養にとつてさしきわりのあると思うものは排除していった。弟子と共に箒を手にして庭を清めることも常であり、粗衣粗食にあまんじ、一度としてよしあしを言うこともなく、こうしなければと思つたことを躊躇することなく実行していつた心念は、正願寺や長崎大音寺に住して堂塔を整備し中興号を賜つた一事によつてもうかがい知ることができらるであらう。彼の堂塔伽藍の整備といふことは信根を増長するには莊嚴こそ大切で

あり、莊嚴そなわりてこそ信仰の道に入らせることができるとの考えにもとづいていた。正願寺から大音寺にすすんだのは明治四十一年七月のことであり、大正十二年六月には推されて百万遍知恩寺の住職となつた。

病の床につかれたのは昭和二年初冬の頃であつた。親族とてなかつた彼は床についても弟子たちは夫々の場で働いているのだから、自分のために働いている者までもわずらわしてはならないと最後まで呼びよせる事もなく、ただ念仏の生活に日を送られ、「いそがねど旅の用意はととのへり 迎への船はいつきたるとも」と辞世の歌をのこした。命終に臨んでは南無阿弥陀仏と唱える彼の念仏は、侍る門弟信者と唱和するといつても一きわ高く、それがかすかになりお口のみ念仏に和して動くようになった時、俄かに西方を指さしてお顔を西に傾けようとなされた。そこで侍者たちは手をそえて西方に体をむけ、壁に掲げられている来迎仏に合掌し、念仏をとええらうちに浄土におかえりになられた。昭和三年三月八日のことである。時に六十九歳、法名を信蓮社実誉上人説音大和尚という。

小説

お西さま

(上)



瀬 直 行

直助はどうしたものかと、迷っていた。行ったところ、ただ人にもまれて帰って来るのが、おちである。それをするうと億劫になった。だが、尚迷っていた。本心では行きたいのである。

今年は二の酉よりない。もし今夜行かなければ、今年のお酉さまには御無沙汰することになるが、そんなことはこれまでになかったような気がする。もうこの年になると、若い頃と違って、なんとなくお酉さまが待ち遠しい気持など、微塵もない。それでいて、ちょっとでも覗いて来ないと、気がすまない。土地の習性が、生活にすみ付いてしまったのかもしれない。

普段着の上に角袖の外套をひっかけ、ぶら

っと家を出た。つまりはお酉さまの方はどうでもよい。それよりもお酉さまをだしにして浅草あたりでいっぱいのみたいのだ。

今夜はお富士さまと浅草署の前をいって、観音堂の裏へ出るいつもの道を止めて、一際賑う千束通りを行くことにした。電車道をつ切り、髪洗橋を渡って、広い通りに出た。両側にはお酉さまへいって来た帰りの人と、これから出かける人の流れが続いていた。

このコンクリートの広い通りは、山谷堀に沿って、吉野橋の袂から吉原の大門をすぎ、三の輪に通じていた。所謂吉原土手といい、土手ハナとも呼ばれていた。その土手も震災後消えて、今日の広いコンクリートの道路に変わった。そういえばその頃から土手の道哲が無くなり、片側に軒を並べていた薄ぎたない古道具屋が姿を消し、幾度となく大門のみか

えり柳は植えかえられて来た。戦災後はその辺一帯だけでも、名物の馬肉屋が無くなり、山谷に出る両側の寿司屋が無くなった。更に吉原が廃止になった今日、町の様相はまるで変り、さびれてしまった。

十一月も末だというのに、こんなにあたたかい晩だと、お酉さまの気分になれない。直助の若い頃は、そろそろ町に冷たい師走の風が吹きまわっていた。人込みにもまれながらも、つきさすような冷たい北風に鼻の頭を赤くし、吐く息が白くなった。それがいつからとなく、年ごとにあたたかくなっていった。

気候も気候だが、この辺は当夜の町の様相が一変した。なにはともあれ、お酉さまへ行く人の波は、大門をくぐって吉原を抜け、お宮へと続いていた。それが最近では吉原を通って行く人は、ぐっと減ってしまった。殊に

吉原が無くなってからは、一段と淋しい。それよりも国際通りから竜泉寺町の電車通りにかけて、人の群れが続いた。だから、土地の者にとっては、当夜の賑わいは、表側と裏側が逆になったように思われる。

こんな薄暗い中に人影がまばらであると、どうしても吉原はなやかな頃の賑いを思い出す。土地の者にはその頃の活気にみちた情景が、脳裡にやき付いてはなれない。大門の周辺一つをとってみても、身動き一つ出来ない程、雑踏をきわめていた。広い往来の中央に太い縄をはり、ゆきと帰りの群集をさばっていた。巡査が声をからし、提燈を振りかざし、整理にあたっていた。闇に提燈の火が揺れ、いつ果てるかもしれぬ人の波が、続いていた。どよめく群集の中から幾本となく熊手が、頭の上に突き出ていた。

一方大門の前側にたち並んだ三階建の馬肉屋は、一段と明るく賑わっていた。店頭には高張提燈をかけた、酒樽や束ねた葱が積みかさねてあった。そして店さきには、太い青竹が立ち並んでいる。そこには客からあずかった熊手が、幾重にもさし込んであった。上機

嫌になった赤ら顔の客は、下足番から熊手を受け取り、又人込みにおされて行く。玄関の広い土間には、靴や下駄が山と束ねられ、それを半纏に向う鉢巻の下足番が、手っ取早くさばいていた。正面の幅広い階段を、赤禪に銀否返しの女中が、威勢よくあがったり、おりたりしている。夜もおそくなれば、一層賑いを増していた。

又、大門から山谷の電車通りにかけて、両側に並んだ寿司屋では、立ち喰いの客が暖簾からはみ出している。今夜ばかりはどんな小店でも、こった返していた。

更に人の波におされて大門を入って行けば、両側には引手茶屋が並んでいる。二階も下もあけひろげ、軒には揃いの提燈をぶらさげ、着飾った芸者や半玉が艶やかである。又、どこの女郎屋も一段と景氣を付けている。それに平常一步も吉原へ足を踏み入れたことのない女房連や娘達が、もの珍らしそうに眺めて行く。

正面が吉原病院になり、横手に吉原池があり、ついで裏門になっていた。この池のまわりには、小屋がけの見世物がかかっていた。

そして裏門を出た通りは、わりと狭く、左右に細い横町がついている。ただ人の波におされていけば、いったいどこをどう歩いていくのか、まるで狐につままれたように見当が付かない。浅草へ行くつもりが、逆の方角へ出たりして、なが年住みなれた土地の者でもまご付いてしまった。

かつて一番札をもらうために、前夜からつめかけ、人死さえあったことをしばしば聞いている。吉原の火が消えたら、きつとお酉さまはさびれるであろう。そんな風にいわれていたが、どこからともなく、結構当夜は人が集って来た。ただこれまでと道順が違って、国際通りから竜泉寺町の電車通にかけて賑わった。

その時の直助は吉原はなやかな頃を忍びながら千束通りを歩いていった。それでも流石に平常と違って、どこの店さきも明るく活氣付いていた。ひさご通りから映画館の前へ来た。雑踏をきわめている。そこにまぎれ込んでもまれることはたまらない。さてどこへ行くか、ちょっと迷った。おそらくいつも行く店は混んでいよう。彼の行きつけの店とい

えば、焼き鳥屋かおでん屋にきまっている。つまり気楽なのみ屋で、一人酔い、勝手な思いにふけていたかった。日頃なじみの店をつくらぬようにしている。

少しでも人通りの少ない道を選んで歩いていたら、観音堂裏の広場へ出てしまった。お堂の横手から仁天門の前へさしかかった時、ふと余程前に酒場の開店披露の通知をもらったことを思い出した。たしか弁天山の近くで、「かもめ」としてあった。一度いってみようと思ひながら、知らない店は億劫なので、そのまま忘れるともなく忘れてしまった。が、全然知らない店へいってみるのも、興味がなくもない。

仲見世の方へは出ないで、この辺であろうと、弁天山の下を歩いていった。その横町には暖簾をさげた小さなのみ屋が並んでいる。その間に挟まれて、薄ぼんやりとした行燈に「かもめ」と書いてあるのが目に入った。ここだなと思ったが、入るのがためらわれた。如何にも入りにくい店つきである。それに又、うっかり入って、あつ化粧の女に酌をされ、べらべら喋られたのではかなわないと思い、

通りすぎてしまった。が、今夜はどこへいっても落着いてのめない、それにせっかく前を通りかかったのだからと思い返し、ドアを押して中へ入った。一瞬ひやつとするような冷たさをおぼえた。狭い店内はいやに静まり返って、薄暗い。

「いらっしやいまし」

どこから声がするのか、姿が見えない。とスタンドの中で椅子にかけていたのか、ひよっこり三十前後の女が立ち上がった。

「今夜はお寒いですね」

「そうかしらん。お酉さまの晩としたら、あったかい方だよ」

「なんですか、わたしは寒くて……」

目の前の壁には値段書きがはってあった。どうやら二級酒は置いてないらしい。一本百五十円として、あるのをみてこいつはあんまりのめないなと思った、おでんとか、湯豆腐とか、焼き鳥とか、こうした店として、きまりきった値段書きが出ていた。特に高くもないが、安くもない。

「一本つけてくれない」

「辛口にしますか？」

「なんだっていいよ」

直助は甘口であろうと、辛口であろうと、あまりこだわらない。それよりも二級酒の方が、口になじんでいた。

まだきいてもみないが、おそらくこの女が、店のマダムであろう。目の前で向うむきになって、一升瓶から酒徳利についている。

わきの瓦斯の上には薬罐の湯が、ちんちんわいている。暫らく相手のあらでもさがすようにうしろ姿を見ていた。豊富な黒髪を無難作にうしろで束ね、ピンでとめている。首筋がか細く、両方の肩がおち、どことなくいたいたしい。地味な位な縞柄の着物に洗いざらしのエプロンをかけていた。

「お待ちせしました」

徳利を置いたので、自分でつこうとしたら「あら、わたしがお酌をしますわ」

と、盃についでくれた。徳利持つ指が長く、かたがよい。

二級酒になれた舌には、ひどくやわらかい。それをのみほした彼は、

「どうお、いっぱいやらない？」

彼女は仰山に二重瞼の眼を輝かせ、頷いて

いた。盃を手にとると、体中にしみ渡るのを味うかのようにあけていた。いける口らしい。

「おでんが出来るの？」

「ええ、でも、今夜は仕込まなかったものですから。すみません」

「それでは湯豆腐をつくってもらおうか」

又も向うむきになって、棚から土鍋をおろし、瓦斯にかけていた。流し元といっても、こっちからまる見えの所にあつた。小さな俎の上で、これも小さな包丁で薬味を切っている。それを見ていると、家庭でやっているように如何にも素人臭い。それになにか考えに

◇われ生くるにあらず、如来われをとおして生きたもうなり。

◇すべては如来のめぐみ、如来をはなれてわれなし。

◇如来よろしきにはからいたもう。

◇如来は無限なり、無限の中に生く、もはやわが生死なし。

◇南無阿彌陀仏とはこれその境なり。

◇生死の煩いここにつきて、ただ南無阿彌陀仏なり。

(藤井 実成)

とらわれているのか、手もとがお留守に見える。別に鈍い動作ではないが、手つ取早くない。やがて湯気の立つ鍋を持って来た。なかなか手際よく出来て、柚子の香が高い。

「あんた一人で、やっているの」

「ええ」

「そいつは大変だな」

「でも、お客さんがないもんですから、結構間にあっています」

それにしても心細い話である。最初「かもめ」の通知を受け取った時、おそらく女の子を四五人おいて、はでにやっているのであろうと思った。そんな店で女の子に取巻かれ、相手を遊ばせながらのものは面倒臭い。それよりもさっぱりした店で、誰からもわずらわされないで、ひとりで酔い心地にひたっていた方がよい。それに正直なところ彼女達のチップのことを考えると、けち臭い話だが、馬鹿馬鹿しい。そんな金がある位なら、のんではなう。ところが、予想がはずれ、あまりに貧相であつた。

「ほくも通知をもらった組だよ」

「そうでしたか。あの案内状はいくらも出

さなかったのですが、どなたでしょう？」

「誰だって、いいじゃないか。わかる時にはわかるよ」

愛想のない奴とでも思ったのか、それ以上ききもしなかった。それにしても、彼は盃をあけながら、色々と臆測していた。この店つきでは、妻君が内職がてらに始めたのであろうか。それとも男が金を出してやらしているのであらうか。どっちにしても生活のためと思われるが、如何にもはりがなく、いやいやながらやっているようにみえた。それとも暗い影がさし浮かぬ顔をしているのは、そこに何か深い事情がひそんでいるのであろうか

「あとをつけてくれない」

「すみません。初めてのお客さんだというのに、あたしまでのんでしまつて……」

こんなさむざむした所でと、口さきまで出たが、抑えて、

「ほさつとして、ひとり考え込んでいたら、誰だって腐ってしまふよ」

薬罐に徳利を入れながら、聞きとれぬ声で、「本当にねえ」と、彼女は吐息とも付かず、呟いていた。

(続)

継母の研修記

牧尾良海

蘭溪という所に、盧なにがしなる人がいた。中年の頃に相次いで両親を亡くしたが、妻の冷氏は誠実な人柄で、夫婦仲もむつまじく平穩に暮らしていた。冷氏は男女ひとりずつ生んだが、小さい方のおむつがとれる頃、ふとした病いがもとで、死んでしまった。

間もなく話があつて、歐陽氏と再婚したがこの女は美しい代りに猛々しい激しい気性の持主であつた。先妻の残した子供に対しては何かにつけて辛く当り、口汚く罵った。少しでも氣にくわぬことがあると、鞭で打つことすら再々であつた。余りのことに盧生が怒つた顔でも見せようものなら、すぐに今度は夫に食つてかかり、二日でも三日でもかなり立てる始末であつた。

或る日のこと、やはり子供への折檻が原因

で、盧生はどうにも我慢がならず、怒つてふいと家を出て、野外へ出かけて行つた。急に雨が降つて来たので、近くの草深い林の中へ雨宿りに馳けこんだが、足を踏み外して穴の様な凹んだ所へ陥ちた。立ち上つて見ると、どうも誰かの家の屋根の上らしいのである。

下では、俄かに「泥棒だ！泥棒だ！」と騒ぎ立てる声がして、あつと言う間に一人の男に縛り上げられてしまった。ところが、縛った男をよく見ると、昔使っていたが、死んだ筈の下男の繆義である。

「おいおい！繆義ではないか！私を誰だと思つているのだ？若旦那だよ。」

繆義は驚いて縛しめをほどくと、急いで家の中へ何か言いつけに入つて行つた。間もなく、家の中から先亡の彼の両親があたふたと

出て来た。盧生は、驚くまいことか、両親と相擁したまま暫くは涙にくれていた。やがて父が言つた。

「儂等のせがれがここへ来るとは、何という奇遇であらう！せめて半日でも皆水入らずで語り合おうではないか！」

両親に伴われて屋内へ入ると、先に死別した妻の冷氏もここに居るのであり、窓の下で布履に刺繡を施していた。懐しさの余り、盧生はつかつかと妻の傍へ歩み寄つて細い腕を握ると、死別以来の寂しさや慕わしさを訴えようとしたが、冷氏はそれを振り切つて逃げすさりながら、

「何という悪い人でしよう！妾に手荒なわるさをするなんて、失礼ですわ！」

と喚き立てた。盧生は、あつけにとられて立ちすくんでいると、

「お前、あれから再婚したのかい？」

と母親が訊くのである。盧生は、後添えを貰つたことをうちあけた。

「男が再婚すると、もう前の妻との深い愛のきずなが断ち切れてしまうのだよ。だからお前を見ても、この嫁はもう覚えてはいない

んだよ。」

母は嫁の冷氏の傍へ寄ると、その耳許へ何かしきりに話していたが、やがて冷氏は始めてかつての夫のことを想い出して、涙にくれていたが、残して来た子供たちや家のことを

小善を積む

善報がないといって、善行を軽じてはならぬ。一滴の水も、遂には瓶に満つる。智者は小善を積んでやがて善に満つる。

めったに善いことをしない者に限って、たまに少しばかりの善行をすると、すぐに果報を求めたがるものです。いつになくせつせと努力をしたのに、誰も認めもしないし、まして賞めてくれる者のないことを愚痴るものです。従ってそれ程に骨を折ったり、自分の利益にもならぬことで努力したりするのは、つまらない思いがちです。しかし少しでも善いことであつたら、果報があろうがなかろうが、決して軽んずることなく、必ずやりとげたいものであります。

このことを逆に申せば、少し位悪いことだ

くどくどと尋ねるのであつた。

「家屋敷の方は何の変りもないが、唯、まだ頑是ない女の子が毎日の様に苦しめられていたので、それが何より可哀相なんだよ。」

冷氏は、この話を聞くと、壁に向つて大声と思つても、些細のことであるとして行ふこととです。ほんとは些細にみえる悪い事が、大きな結果をまねくことに気をつけねばなりません。見付かったら百年目だという言葉があります。これは見付からない内は平気であるということでしょう。昔から誰も知らぬと思いきや天知る地知る我知ると申します。

よく裏表のない人だという讃められる人があります。もし裏表のある人であると、たと

え少し位才能があり器用であつても、人から信用されることがありません。従つて相手にされないの、折角の才能も發揮する機会がありません。常に警戒の目を以て見られてい

て泣き出した。盧生も胸がつまって来て、身をふるわせて共に泣いた。

父は盧生に向つて言った。

「お前は子供たちを抱えているのに、それをかばうことを考えず、気の強い女なぞを後あるとすれば、それは裏表のない人のことをいいます。

瓶に水をはるには、池に沈めて一挙に水を入れることもあり得ますが、実際には口から少しずつ入れて一杯にします。世の中には一挙に解決することを願つたり、一時に大金を手にしたいと夢みる人があります。これはいずれも夢であつて、覚めてみて後悔するばかりです。

善いことを行ふにしても、そんなに大きなことがある筈ありません。小善を尊び、これを積んでゆく人こそ智者であります。この積み重ねの努力のないところに大成はありません。一銭を軽んずる者は、いつか一銭に泣く時にあい後悔するのです。日常の生活に油断のないことも同じ意味です。健康に留意して天寿を全うするのも同じことです。善報のあるなしに関係なく小善を積んでゆくことです

妻にするからこうなったのじや。言うなれば鸛の雛のことを念に置かずに、鸛鸛を呼び寄せたのと同じ訳じや。こうなつては、巢をこわして子を取るのだ！ 災いはお前自らが招いたのだから、今更後悔しても何の詮もないというものだ。」

「後妻なんか、惜しいと思わぬがよいよ。お前、それよりも先祖の供養を絶やさぬようにすることが大切なんだよ。」

母も口をはさんで言うのだった。

「先祖へのお祭りを絶やさぬ為には、ここにいる嫁の方がいいなあ、婆さんや！」

「そんなことを言っても、ここにいる嫁御はもう長く冥界の帳簿に登録してしまつてあるのですから、どうしてあの孫たちの面倒がみられましょう？」

「そりやあ、できるさ。あの後妻はこの僕が捉えて来るから、婆さんが朝な夕な側において教えこむのじや。早速ここに居る嫁をせがれと一緒に行かせよう。あの後妻の姿形を取つて家事一切をやつてもらい、孫たちが一人前になつてそれぞれかたづいた曉には、再びここへ歸つて来てもらうのだ。」

「妾はこうして毎日御両親の膝元に居たのですから、俄かにお別れして現し世へ戻るなんて、とてもできませんわ。」

冷氏が、しんみりと言う言へば、母の方でもつりこまれて、共に歎くのであつた。

「お前はな、存命中は孝行な嫁であつたが、今又行つて慈しみぶかい母になつてやることも、条理から言つて何れも立派なことだよ。何もここに恋々としていることはないのじやよ。」

父親が熱心にすすめるので、それでは漸く話がまとまつた。盧生と冷氏の二人は、それを告げて外へ出、その家の屋根の一角に梯子をかけてもらつて、一段一段と昇つて行つた。高い所から見下すと、今上つて来た所は遙か下の彼方にかすみ、首をのばして見送つていた両親の姿も何時の間にか小さく小さくなつて見えなくなった。

盧生は決心を固めて、冷氏をつれて我が家に歸つて来た。門の所まで来ると、冷氏は風の様に忽ち先へ入つて行つた。と、その時二人の子供が先を争う様にしてかけ出して来た。

「お父さんが家を出てから、義母さんは鉄

の杖でびしびしと私たちを打つたんですよ。だけど、急に顔色が変わつて、地べたに倒れたなり、ちつとも動かないんですよ。」

男の子と女の子の口々に言う告げぐちが終らないうちに、後妻の歐陽氏が静かに姿を現わした。子供たちはびっくりして、おのきながら父の袖を引っぱり、父の蔭にかくれようとするのであつた。ところが、歐陽氏は二人の傍へよると、慕わしげに二人の頭をなでていたが、感動を押え切れぬ様に涙にむせびながら、

「妾がお前たちを後へ残して逝つてから、まだ三年にもならぬのに、ひどくやせこけてしまつたのねえ！」

と言つた。姿こそ歐陽氏だが、その声の特長はまぎれもなく先妻冷氏のそれであつた。盧生はすっかり喜んで言つた。

「この人はお前たちの本当のお母さんなんだよ。もう、恐がることなんかないんだよ。」子供たちはきらきらと眼をかがやかしてお互いに顔を見合わせるばかりであつた。

歐陽氏は女の子に向つて訊ねた。

「もう先に、お母さんが箱の中の純金でう

で輪を作ってあげたのに、あれ、どうしちやったの？」

「お母さんが今まげ押さえに使ってるそのかんざしが、あたしの金のうで輪を作りなおしたのよ。」

「あら、妾、どうしてこれを使っているのかしら？ いいわ、又、あんたにさしてあげるわ。」

彼女は頭からかんざしをぬきとると、女の子にさしてやり、今度は、男の子に向って訊ねた。

「お母さんがもう先に、百花と鸞の模様の錦の切れで、ほくの為にぬいとり帯を作ったの、ほくはどうしてそれを締めていないの？」

男の子はわるびれもせず答えた。

「あれは、お父ちゃんがお母さんの膝袴に作り代えちやったんだよ。」

歐陽氏は盧生の方をにらんで言った。

「女に眼のくらんだ男というものは、後妻の為にそんなことまでするのねえ！ 小さい子供たちが叩かれたりするのも無理ないわねえ。」

盧生は、うな垂れてひたすら謝まるばかりであった。

皆で一緒に部屋へ入ると、炉やかまど、はては化粧台や鏡など、一切の道具の配置も先妻冷氏の頃とはすっかり変ってしまった。た。歐陽氏は、変ったあたりを見廻して、

「人、一朝、事を謝すれば、百般すべてこれを後人に聴けとか言う古い諺がありますけれど、本当にその通りで、ひどいものねえ。」と、しみじみ慨いて言った。

衣装箱の鎖をとって中を開けて見ると、羽織やうちかけなど、何れも派手な色模様のもばかりがぎっしりたたまれて居て、昔のものなどは一枚も見えないのである。盧生に詰めよって訊ねるので、

「今の新しい着物の方が、あんたの身体にはびったりだよ、昔の古い着物など、気にかけない方がいいよ。」と言った。

「貴君の心底は、語るにおちたと言うべきで、よつく判りましたわ。」

盧生は、慌てて失言を謝まったが、彼女の不気嫌は中々直りそうもなかった。

嫁と姑との争い

ある日、釈尊は舍衛城で多くのお弟子たちにお話をしながら、次の話をされた。

昔、一人の孝行な青年があった。父が死んでから、彼は母に一層の孝養をつくしていた。母は子が妻も娶らず仕えてくれるのに感謝していたが、そのままではすまぬと思い、母は一人の女をつれ帰って、青年の妻とした。青年は母の好意を喜び、家内は和楽の声が絶えなかった。しばらくすると女同志の我まが出てきて、次第に嫁と姑との間に争いことが起きてきた。孝行な青年も最初は二人の争いに堪えていたが、やがて女に心をひかれて、しばらく別居することとした。そこで母は泣く泣く家を出て親類の家を頼り、賃仕事しながら細々とその日その日を送っていた。こうして母が家を出ると、間もなく妻は懐妊し、やがて男子を産んだ。彼女は夫や隣人などに対して

「姑が家にいる間は、欲しいと思っていた子もできなかった。これをみても姑が悪かったということがわかるであろう」

歐陽氏は窓にもたれて庭先をみつめていたが、やがてふり向いて盧生に訊いた。

「もう先にここにあった桃の木は、何処へ植えかえたのですか？」

「あの木は、あんたが死んでから、新夫人がしよっちゆう枝を剪っていたので枯れてしまったんだよ。」

「樹ですらこの通りですものねえ。子供では湛らないわけですわ。」

又しても子供たちの方を見て、さめざめと泣くのであった。やがて彼女は、かいがいしく甕を出して来て水を汲んだり、火を燃しつけたりしてお勝手仕事にかかったので、「もう少し休んでいたらどうだ？」と言っていたわると、

「これは後妻に來た人の身体髪膚なんですから、貴君にたとへて大事に可愛がって貰えればいいのでしようがねえ。そうではありませんよ。妾がこの家へ來たからには、日がな一日、香をたいてほんやりしては居られませんかよ。」と、づけづけ言った。盧生は、顔色を変えて声をのみ、歐陽氏の美しい顔を凝視していた。

「妻は父君の命によつてここへ來たのです。今更貴君の過まちを正そうとして來た訳ではありません。唯、怨みをかくして喜びごだけをするので、何だか婦徳が傷付けられる様な氣持がしてなりませんので、一度だけは憤りを吐き出さずには居られません。」

こう言われてみれば誠にもっともなこと

で、盧生は返す言葉一つある訳ではない。

然し、それからというものは、夫婦仲もむつまじくなり、彼女は家の中をよく治めて面倒をみたので、十二年ほど経つと娘も男の子も立派に成人した。娘は同村の鄭秀才に嫁ぎ、男の子は錢貢士の娘から嫁をもらった。家庭は円満で、何一つ間然する所がなかった。或る晩のことである。家庭で酒宴を開き、仲よく献酬しているうちに夫婦ともすっかり酔ってしまった。

この時、夫人は急に容子をあらためて盧生に言った。

「昨晚、お父君から帰つて來る様に言われた夢をみましたので、これで永のお別れをしなければなりません。夫婦としての御縁もこれでもう尽きてしまふ訳です。」

といいふらした。この話を伝え聞いた母は大変悲しみ

「母を追い出して、立派な生活ができ、子供までもうけて、賑かに暮してゆけるとすれば正義は死んだも同然である。正しいことが通らなければ正義の葬式を出してやる」

といって、錦と杓子をもって墓地へゆき、水浴して、白衣をつけ、髪をみだして米をとぎ始めた。

帝釈天は、これを見て氣の毒に思い、婆羅門の姿となつて、母の前に現れた。そして、

「正義は死んだというが、正義は嚴として存在している。余を見よ、余は正義である」といった。すると母は

「正義は死にました。悪人の榮えているのが、その証であります。子供のなかった嫁が、私を追い出してから子供が生れ、楽しく暮しているではありませんか」と答えた。帝釈天は更に

「女よ、正義である余は現に生きている。汝のためにここへきた。然らば、余の火で悪い嫁も孫も焼き殺してやろう」というと、母は大いに驚き

降ってわいた急な話に、盧生は涙にくれて口説いた。

「お前とは早く別れてしまったが、いい具合に再び戻ってくれたのだから、どうか共白毛になるまで居ておくれ。どうして儂を捨ておいて行くのだね？」

「貴君のお子たちのお世話をする為に来たのですから、今度は貴君の御両親にお仕えする為に行かねばなりません。どうしても言つてこの妾をお引きとめになると、貴君が今度は不孝の子になってしまいますのよ。」

盧生は部屋の隅の方へ向いて大声で身をふるわせて泣いた。その一寸したすきに、彼女は寝台の上へ登るとそのまま絶息して動かなくなつた。

驚き歎いていると、彼女は忽ち又起き上つて来て坐つた。

「お姉さまは既に帰られましたから、妹の妾が代りに参りましたのよ。」

声から察すると、後妻の歐陽氏の声である。盧生は、又々この女に苦しめられるのかと、色を失つたが、その女は静かに口を開いた。

「貴君、恐れなされることはありませんわ。」

妾は今まで御両親のお膝元にいて、十二年間も色々と教えていただきました。もう先の妾の行いが婦道を外れたものであったことを始めて悟りました。これからはお姉さまのなさり方をお手本にして、何年でもつとめ、先の過ちをつぐなうつもりです。」

盧生は喜んで、早速息子と呼び委細を話した。息子も悲しみ且つは喜んだ。

「妾が十数年ここに居ない間に、あんたはすっかり成人して立派になり、嫁御も貰ひましたのねえ。どうか妾の昔の悪いことを思い出さないで、これからお父様をよく助けてあげてね。」

「前のお母さんが苦勞して尽して下さったのは実は、後の義母さんの肢体を藉りてやつて下さった訳です。旧惡だなんて、そんなことを考えてやしませんよ。」

後妻歐陽氏はこれを聞いて大いに喜び、それからはよく夫を助け子を教えて、恩義ならびに備わり、天晴れ賢婦人として皆から讃えられたということである

(清「諧鐸」鬼婦持家)

「神様、どうぞ嫁や孫を殺さないで下さい。それよりも嫁も孫も、私も仲よく暮してゆけますように力を添えて下さい」

とたのんだ。帝釈天はこう教えた。

「女よ、汝がいじめられても、汝自身、正義を捨てないならば、汝は愛する孫や嫁と共に睦しく暮してゆけるであろう。恐れるな。汝の子も、嫁も反省して、汝を迎えるために、ここへくるであろう、勤めはげんで善を修めよ」

それから間もなく、子と嫁とは、母をたずねて墓地へきて、今日までの罪をわびた。母の手をとって家に帰り、それからは平和な月日を送った。

誰でも、自ら正義を捨てない者には、正義は永久に生きている。ときによって感情がもつれ争うことがあつても、お互に正義を信じ善を修めれば、家内は常に睦しい。

もし感情がたかぶつて、理性を失つてくると、次第に正義が影をひそめてくるようになる。従つてあくまでも正義が存在すること信じ、正義を捨てないように心掛けねばならない。そこに平和が自然に生れる。



ツトムくんと自転車

みなくち・まさひろ

ツトムくんは近ごろゆかいでゆかいでしか

たがありません。こんど三年生になったツト

ムくんは、前から子供用の自転車を一台もっ

ていたのですが、もうだいぶ古く小さくなっ

てしまったので、まもなくやってくる誕生日

にもっと大きな新しい自転車を買ってもら

やくそくをお父さんとしてあったからです。

土よう日のごと、一年生になったばかりの

妹のミチコちゃんと学校帰りにお寺の前を通

りすぎようとしたとき、みんなが門のところ

でなにかを見ているのでありました。

「あッ、お兄ちゃん、ケンちゃんたちがな

にか見てるわヨ」

「よし、ミチコ行ってみよう」

二人がみんなの肩の間から顔をのぞかせて

みると、白い紙をはったほそい長いたてかん

ばんに大きなふとい字で

四月八日（日）

「灌仏会」（花まつり）

と書いてありました。だれかが

「お寺でなにかあるらしいヨ、『かんぶつ

え』って何のことだろうナ」

というと、ミチコちゃんのとりにいたケン

ちゃんが、

「よく読んでみるヨ、『花まつり』って下

にちゃんと書いてあるじゃないか」

と大声をだしました。ケンちゃんは

「でも『かんぶつえ』なんてへんな名前だ

なッ」

とツトムくんたちの耳もとでいいました。

ツトムくんは四月十日生れだったので、そ

れよりも二日早い花まつりのことはだれより

もよく知っていました。きれいな春の花でかざられた花御堂や、その中に天と地を指さして立っている赤ちゃんのおしゃかさまのおつむりが、甘茶をかけるたびに日の光をうけてキラキラ光っていたきょねんの花まつりの日のことを思いだしたツトムくんは、ことしもお寺へ行ってみようと思いました。

次の日は朝から暖かなよい日よう日だったので、お寺の庭は近所の大ぜいの子供たちでにぎわっていました。ツトムくんとミチコちゃんが、お寺の門をくぐったときにはもう、みんな本堂にあがって和尚さんのお話を聞いていました。

「みなさん、仏教をおひらきになったおしゃかさまはインドのカピラというお城の王子さまとしてお生れになったかたですが、そのおしゃかさまのお誕生をきねんするおまつりが四月八日の花まつりなのです。お経にはおしゃかさまは、お母さんのマールヤさまがお里がえりするとちゅう、ルンビニという公園のアソカの樹の花かげでお生れになった、とでています。そしてそのとき、あまい雨が生れたばかりのおしゃかさ

まの体
にふり
かかっ
たとい
うこと
から甘
茶をか
ける習
慣が始
ったと
いわれ
ていま
す。』



かんぶつえ』というのはそれをいいあらわした名前です。今日はみんなでたくさん甘茶をそそいでおしゃかさまのお誕生をお祝いいたしましょう。けれどもお花をかざったり、甘茶をかけたりすることばかりが花まつりではありません。みなさんのすんでいるこの世の中には、くらしがまずしいために苦しんでいるたくさんのおめくまれな人たちがいるのです。かなしいめにあった人も病気の人もいます、おしゃかさまは、

だれもがなんのしんばいもなくしあわせにくらしてゆける世の中をつくるために考えたり努力されたりしたかたです。ですから私たちもそのようなきのどくな人たちが少しでも早く、元気でしあわせな楽しいくらしができるよう、みんなで力をあわせてあげましてあげようではありませんか。みなさんがいつもその心がけをわすれないように今日はどうか、ひとすくいの甘茶にあわれみとはげましのこころをこめて、おしゃかさまのお誕生を祝いましょう」

和尚さんのお話が終ったあと、みんなが花御堂のまわりで甘茶のじゅんばんを待っていると、ツトムくんは

「ボクにはやさしいお父さんやお母さん、それに妹もいる。ボクが生れてからいままでにどんな苦しいことやかなしいことがあっただろうか。なんだかそんなことはなんにもなかったような気がする。ボクはちょうど、おしゃかさまが王子さまだったときのようになにもたりないものがないくらいしあわせなんだな」

とこんなことを考えていました。

夕ごはんのとき、ツトムくんは決心をしたようにこういいました。

「ボクね、もう新しい自転車いらないヨ。ボクがもう少し大きくなって大人の自転車に乗れるようになるまでせいたくをいわずにいまのでがまんするヨ」

するとお母さんがけげんそうに「あら、ツトムちゃんタラあんなに新しい自転車をおねだりしていたのに、どうした風の吹きまわしかしら……」

とたずねました。ミチコちゃんまでが

「お兄ちゃんが自転車買ってもらわないなら、アタシも」着せかえ人形セット「いらないワ」

といったので、いまままで黙って聞いていたお父さんがテーブルの向うがわから、

「おいおい、この子たちは一体どうしたんだろうなあ、ねえ、お母さん」

けれどもツトムくんもミチコちゃんも黙ったままなのでお父さんが口をついでいいました。

「ツトムもミチコも二人とも本当に欲しくないのかい。それならばあしたもう一度デ

パートに行つて、きのう頼んでおいた自転車とお人形を断つてこようかな」

「エエッ、お父さんそれホント、そんならボクの誕生日までにデパートから荷物がと

童 心 仏 心

一、新案「感謝ガム」

近頃はいろいろのチェーインガムが流行して、果実が入っていたり、お酒が入っていたりするものがあります。

ある日、伸太君は薬屋さんから、チェーインガムを買つてきて、おじいさんに説明しました。

「これは肝臓の薬が入っているガムだよ。

おじいさんにあげるから、おたべヨ」

「ほほう、このガムには薬が入っているのかネ。有難うヨ、一つたべてみましょう」

おじいさんは、ガムをかみながら、こういいました。

「わしがもしガム会社の社長になったら、感謝ガムというのを作りたいものだネ。それはナ、ガムを噛んでいるうちに、何でも有難

どくんだネ」

もう二人ともうれしくてうれしくてたまりません。ツトムくんは心のそこから

「お父さん、お母さんどうもありがとう」

くなつてくるガムにするのじゃ。ガムの味が口の中からお腹の中にしみこむと、心の奥から自然と感謝の気持が湧いてくる。そのガムをかんでいると、心の底から有難うございまして、口をついて出るというわけじゃ。感謝ガムがどんどん売れて、世界中の人たちが皆食べるようになれば、戦争なんてなくなるのだから」

これを聞いた伸太君は

「そうだな。口をバクバクやる度に、有難うございましていうのは素晴らしいナ」と思いました。

二、取越苦労さん

取越苦労さんには一人の子供がいました。苦労さんは自分の子供がちょっとでも、目の前にいないと心配でなりません。ですから寝てもさめても子供につきっきりで、子供の番をしていました。

ミチコちゃんもあとから

「アタシもありがとう」

とニコニコしながらいいました。

「いやだな、外に出て、思う存分に息をしたいなあ」

ある日、子供はこっそりと、おもてに遊びに行きました。さあ大変、苦労さんは気違ひのようにあたりを探しました。

「自動車にひかれやしないかな。それとも、池にはまったんじゃないかな。いや、ころんで大けがをしているかもしれない」

このようすを高い木に登って遊んでいた子供がみて、

「僕は自動車には注意しているヨ。池のそばに行つても、水の中に入りはしない。僕のことを少しも信用してくれないのだな。もっと自由にとび回れるように、ほっておいてくれないものかな、僕はまるで牢屋にいるみたいじゃないか」

とつぶやきながら、青くすんだ広い空を見上げて、思わずためいきをつきました。小鳥が二三羽とんでいました。

扉の御法語

浄土一宗の、諸宗に越え、念仏一行の、諸行にすぐれたりといふ事は、万機を摂するかたを言ふなり。(勅修御伝第四十五、禅勝房に示されける御詞)

禅勝房は天台宗について勉学に励んでいましたが、その教えの有難いことを知るにつけても、どうやら自分の才能を省みたとき、その教えについてゆけないと考えました。そこで熊谷入道の所に行つて、いろいろと話を聞き更に詳しいことを学ぶために法然上人を訪ねました。

上人の教えのおかげで禅勝房はお弟子の中でも信心堅固であるとの評判を得ました。この禅勝房に対して上人が、自力他力とはこんな事だと示された御詞があります。その御詞の結論として申されたのが、浄土一宗は諸宗に越えて優れているというお詞でした。そしてその理由は、お念仏を唱えるという一事は、あらゆる要件を整え持っているという点をいうのであると申されました。

仏教ではものを考える考え方をいろいろと探求し、人間の本来のあり方を考えます。従つて難しい各種の学説があるわけですが、そのどれも大切と申せば大切であり、真理であるといえは真理です。しかしそうした学問について上人は、学問することは必要であるし自分もおかげでいろいろと知ることができたが、しかしこうした智恵は往生という点については全く役にたたなかつたと申されています。これは何も自分に力がないとか努力がたりないとかいう問題でなく、時代についていけば末法であり、罪多い人々ばかりであるがゆえだとされています。

この上人の自覚と信念が大切なのです。上人は時代に相応し、ほんとに人を救ふことのできるのは、アミダさまの本願を信じてお念仏することしか方法がないではないかと申されるのです。各宗の説く学問や行法を決して粗末にしたり軽じていません。

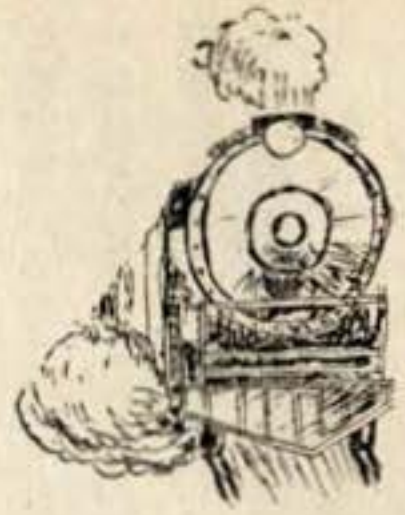
上人はあくまでも素直に反省し、深く懺悔されたからこそ、日々の生活に役立つ庶民の信仰を示されました。末法に生れたことを悲しみ、難しい行法のできないことを嘆くのは

女の人が男子になったり、男子が女の人になったりすることのできないことを悲嘆するのと同じだと申されました。それよりもこの身このままで仏法の教えの中にひたるにはお念仏を唱える一行しかないことを強調されました。

「智者は智者にて申てむまれ、愚者は愚者にて申てむまれ、道心ある人も申てむまれ、道心なき人も申てむまれ、乃至富貴のものも、貧賤のものも、慈悲あるものも、慈悲なきものも、欲ふかきものも、腹あしきものも、本願の不思議にて、念仏だに申せば、いづれもみな往生するなり」

これこそ万機を摂するかたであります。

万機を摂するかたということをし、いいかえるならば、絶対ということになります。智者と愚者、道心のあるなし、富貴と貧賤、慈悲のあるなし、さては欲の深さ加減や腹の善悪といったものは、皆相対的のものです。だからこそ悪を遠ざけ、善に近づくために努力しなければなりません。しかし往生という宗教的信念は絶対でなければ意味がありません。修行の程度によって段々と向上するというようなものではありません。



ラーゲルの思い出 第九話
実話 帰還列車の旅

吉 野 翠 幹

大陸の夜明け前は、気温がグングン下って酷しい冷え込みが身体にこたえた。さっきまで淡い光を投げていた上弦の月が、向山にかかれると、星の光が一層明るく、内地では見られない星明りのおかげで、歩くのにさして苦労はなかった。思い出深いアングレン川はすでに塞き止められているので、大小様々の石の間を数条の水が申しわけのように流れていた。私たちは石と石の間を縫うようにして川を渡って行った。一列に長くのびた百名足らずの一行からは話声一つ聞かれなかった。恐らくは一人一人の腹の中では、煮えかえるような憤懣が秘められているのであろう。ただ黙々として暗夜の曠野を進んで行った。

終戦後すでに三ヶ年一方ならぬ辛苦を経てきて、唯一の念願であった日本への帰還が開

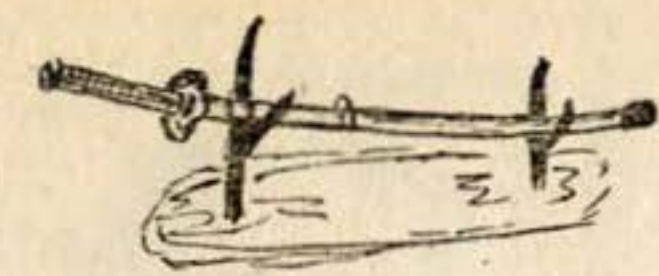
始され、残る隊員の数から推しても大隊全員が引き上げとなるのを目撃にしていた。その時突如として私たちの一隊だけが大隊を追放されたのである。昨夜集合を命ぜられてからもちろん一睡もせず歩いているのだが、睡気を憶える程心の中はおだやかであり得なかった。こうして一步一步と歩んでゆくことは即ち日本帰還に背を向けて反対方向に進むこととであった。これから私たちの赴く所は、炭坑大隊であり地下数百米を縦横に走る坑内であった。刻々と近づいてくる縦坑は、私たちをすっぱり呑み込もうと待ちかまえている地獄の入口に他ならなかった。私たちの足どりが鉛のよう重く、身体中から力が抜けてゆくのは当然のことでもあった。

これまで大隊において、私たちは共産主義

を批判したことはなかった。オルグ団の活動を誹謗したことはなかった。たとえ日本人が日本人をソ連に売る仕種を憎んだにしても、彼等を非難することは許されぬことであった。またソ連から拘引されることを承知で、そんな危険をあえてする必要もなし、日本帰還を放棄してまで彼等に刃向うことはあり得なかった。アングレンのソ連人の中には十五年二十年と長期の刑に服している者が幾人かいることを知っていた。彼等は共産主義に反することを述べたというだけで処刑されたのであった。まして狭い鉄条網に囲まれた容器の中に住んでいる私たちにとって、オルグ団を非難するが如きことは、考えも及ばぬことであった。それにも拘らず、私たちは反動のレッテルをはられて追放された。

長かった夜が明けて、空が明るくなった頃に、私たちは炭坑大隊にたどりついた。簡単に人員点呼があっただけで幕舎に案内され、その日は日曜でもあって一日中そこで休息を与えられた。

炭坑大隊のオルグ団の委員長は大垣中尉であつた。彼の名はズツと以前から私たちまで知っている位に有名であつた。そして彼こそは陰険と虚偽の権化であるように想像されていた。何しろ彼の噂が出る毎に、まず唾をはきすてて苦々しく語り合った程である。それというのも私たちの体験によれば、少なくとも前の大隊のオルグ団は、共産主義の研修と



同時にソ連への密告機関であつた。彼等の成績をあげるために何人かがソ連に売られてきた。従つて大隊中が次第に猜疑と侮蔑の色が濃くなって暗たんたる空気に包まれていた。しかし実際の大垣中尉は、かねて私たちが予想していたものとは正反対に見え

た。あれが大垣中尉だと教えられ、彼の姿を望見したところによれば、中肉中背でいかにもキビキビした好感のもてる青年将校であつた。そして彼にして初めてこの特殊な炭坑大隊を一手に引き受けて指揮することができるとも思った。このことは私たちの気持ちをずい分落ちつけ、明るいものとしてくれた。

彼を一言にして評すれば、頭脳明晰で如才ない好青年ということであつた。士官学校で首席となることは容易でない筈である。激しい競争に打ち勝ち、優秀な成績をあげるには並々ならぬ努力があつたであらう。彼はその恩賜の軍刀を拝受した組であつた。それによつて彼は将官までの栄達を予約されたのであり、将来の軍部を荷負うものとして囑望されたのである。しかし一度敗戦となりソ連に拘留されたとなれば、彼は誰よりも早く共産主義賛成の署名を行い、自ら共産主義者の先頭に立つて主義宣揚のために努力した。作業班を監督してノルマをあげさせ、密告業務を精密に行つて成績をあげた。二千人近い隊員を指揮してソ連に忠勤をはげみ、炭坑大隊を牛耳つた。

さてその翌日、当然私たちも作業に出るわけであるが、予想に反して私たちを炭坑に入れるようなことをしなかった。そればかりでなく、私たち新参のものだけで作業班が編成され、作業の内容も簡単な土木作業であつた。場所も大隊から五百米位しか離れていない近くであり、さして高くもない岡を崩して平地にする作業であつた。一体何んの目的で岡を崩すのか、そんなことは判らなくてよいことであつたが、更にノルマがどの程度なのかもし示されず、監督の姿さえ見えなかった。私たちは初夏を迎えて季節はよいし、呑気に円匙と十字鋏を振つて日を暮した。特に精を出す必要もないので、円匙の手を休めてはあらぬ方を眺めるのであつた。張りも元氣もなくした一同は、休憩中にすら談笑する声が全く聞かれなかった。虚脱したような私たちは、ほんとに土偶人形というところであつた。

こんな作業が二週間も続いたであらうか、とにかく私たちは崖に向つて土を崩すという単調であり、どこまで崩してゆくのか際限のない仕事に、ずっと以前から従事していたような感じになった。

ある日、例の如く作業を終って帰ってくる
と、ラーゲル中が異様な興奮にかられている
ことを感じた。何かあったに違いないと思
いながら、私たちが部屋に戻ってみると、何ん
と第何回目かの日本帰還命令が発表された
ということであった。このことだけであつたら
私たちが別に驚くことはなかったが、その発
表人名中に、私の名が載っていると知らされ
て、頭がグラグラする程驚いた。晴天の霹靂
というか、急にはとても信じられないことな
ので、急いで本部に行ってみた。すると矢張
り私の名が入っていることは確かであつた。
そればかりでなく追放組の三分の一までの名
がみつかった。

私は自分の足が地につかず、宙を飛ぶよう
な思いで、部屋に戻ってくると、部屋中も大
変な騒ぎとなっていた。今回の帰還命令は、
今までになく大規模のもので、三分の二以上
が帰るだろうということであつた。この大隊
に割り当てられた人員の選定については、旧
来の炭坑大隊が独占することなく、私たち新
参の者にも按分して割り当てたとのことであ
つた。しかしこの公平に按分したことには、

それだけの理由が別にあつた。

私たちの一団が反動というレッテルをは
られて大隊を追放されてから、大隊は容易なら
ぬ動揺をきたした。私たちを同情する者たち
から、反動なるが故に日本に帰さないとい
うのは、いかにオルグ団といえども専横が過
ぎるといふ非難が勃然と起つた。また私たち
同情を持たぬ者からみても、大隊に反動がい
るからこそ自分たちがそれより早く帰れる
であろうが、反動がいなくなり全部グルーブ員
だけだとすれば、当然彼等同志の中に後に廻
される者ができるわけである。とにかくこう
して私たちが追放されたことが、逆に反動も
含めて日本に帰せという運動が起る原因とな
つてしまつた。

理由はともかく私たちの一部が帰れるので
ある。もし追放されずに前の大隊にいたら、
どうだったか判らない。少なくとも反動も日
本に帰すという見本にならなかつたであろ
う。何が幸するか判らぬものであつた。

その夜はオチオチ睡つてなどいられるもの
でなかつた。私も早めに起きて支度を始めた。

支度といつても飯盒と水筒があればよいわけ
で、至極簡単なものであつた。しかし私はい
ざという場合のために私物の将校服と革靴を
大切に保存していた。私服といつても何年来
着古したもので、これ以上着れば駄目になる
というところで藏つてしまつたのである。そ
れにこれは冬服であるから夏に向うその頃
には適當でないが、暑いのを承知で着込んだ。
靴も同じことで、一月や二月位なら履ける程
度のものであつた。しかしそのおかげで、ベ
ラベラなソ連給与の夏服を着ないですむし、
ズック製の板靴を履かずにすんだわけであ
つた。支度を終ると、集合時間の午前五時には
早かつたが所定の場所に行った。

集合を命ぜられた場所は更に鉄条網で囲ま
れていて、暗くてよく見えないものすでに
多数の者が集つていた。ここに集つた者は、
一般の者と隔離され面会を禁止されていた。
やがて大垣中尉が現れて、その日の行事予定
を伝えた。彼の服装からして彼も亦私たちと
一諸に帰ることが知られた。これからは彼の
指揮下に入つて長い旅をするのかと思うと、命
令下達する姿が一層凜々しくもあり、信頼で

きる好ましいものに見えた。しかし後日になって彼はすんでのことに海に投げ込まれ、殺される一步手前にまで追い込まれたが、「ソ連の奴れいを日本に帰すな」という声が、それ程までに根を張っていたことを、その時は誰も予想していなかった。

ラーゲルの最後の朝食を立ったままですませると、一同は別の広場に集まり隊形を整えた。そこでは各人の所持品検査が行われた。係員が十名宛名を呼ぶと、その者は小屋に入った。検査を終った者が二度と広場に帰ってこないのは、恐らく別の所に集合している為であろう。従って広場にいた人員は段々と減ってゆくわけで、自分の番が近づくことを楽しみに退くつはしなかった。午後になると残



った人員も僅かになって、今度こそ自分の名が呼ばれるという期待も大きくなったが、次第に焦りもでてきた。太陽はかなり西の方に廻って、いよいよ広場には私一人しか残らぬことになった。今度係員が小屋から姿を見せれば、たった一人の私の名を呼ぶしかないで、いまや遅しと待っていた。

それにしても、最後に小屋に入った組の検査に時間がかかり過ぎるように思われた。係員は名簿を手にして名を呼んでいたので、私一人がここにいる事を忘れる心配はない。私は目をこらして小屋の入口を熟視していた。私は一刻千秋の思いで待っていた。一時間かいや二時間か、とにかく待ちに待った。その内に日が暮れかかってきた。帰還組以外の者たちは作業を終って、いつものように帰ってきたことが、かすかな声や音で察しられた。私は遂に諦めた。私はスゴスゴもとの部屋に戻り床の上に横たわった。作業から帰ってきた同僚たちは、私をみて不思議そうにいろいろと質ねてくれた。しかし私は目を閉じたまま何も返事をする気になれなかった。同僚たちは夕食をすませ、そろ／＼寝る支度にか

かった。その時ソ連の係員が私の枕もとに現れて、私の名を呼んだ。私は横飛びに検査場に駆けつけた。

まさか、こんな手数のかかる嫌がらせをされる程、新参の私はこの大隊になじんでいなかった。そうすると帰還者名簿に一応はのつた私のことを、最後の最後まで問題にしたのだと思うしかなかった。

あくる日は午前八時にラーゲルを出発した。さんさんとふる初夏の陽を浴びて、冬服を着ていても私は暑さを感じなかった。途中で他の大隊の帰還者と合流し、蜿蜒たる五列縦隊が土煙をあげて進んで行った。ここから見える人員だけでも三千人をはるかにこすと思われる大縦隊の最後から、私は一人隊列から離れて歩いて行った。馴染みとなったソ連人たちは道すじに出て手を振って送ってくれた。

ここに五列縦隊というのは、ソ連式の隊形であった。日本には二列、三列、四列の三種類しかなかった。五列だと隊形変換をどのようにするか判らないが、人員の数を調べるには便利であった。私たちはこれまで毎日何回

となく人員を調べられた。衛門の出入り、作業場の行き帰りその他随時人員点検があった。その場合、ソ連の衛兵は私たちを五列縦隊に整列させ、五、十、十五といったように五の加え算で人員を調べた。つまり掛算は使しなかった。それでもよく間違つて何回もやり直し、結局は私たちが手伝うことになった。日本ではいきなり番号をかけ、最後の伍のものが満とか一欠とか報告すれば、直ちに総員何名と計算する方式であつた。気の好いソ連兵にとっては、こんな器用な方式は真似たくもできない芸当であつた。

余談はさておき、その日の夕方に駅に着いた。そこには待望の列車があつた。列車のほぼ中央に指揮車があつて、大垣中尉を初め指揮者たちが乗つた。少し離れたところに炊事車があつて大釜が二つ具えてあつた。最後に近く将校車があつて、私はそこに乗つた。

午後七時頃、ゴトリと音をたて、帰還列車が発車した。この日からナホトカに到着するまでの二十五日間に亘り、昼となく夜となく耳にして、車輪の響きに日本に近づく快感を味つたが、その車輪の第一声を聞いたわけで

ある。二日後にはタシケントを通過した。ウズベック共和国からカザック共和国を通り抜けノヴォシビルスクでシベリア本線に入るまで四千軒近くはあるのでなからうか。二週間で位かかる長い鉄道の沿線は荒涼の一字につきた。何時間走つても木一本、犬一匹見かけないのもこの地区であつた。かつての往路で、マリアアの発熱に苦しみながら、砂煙りをすかしてラクダの隊商をみたのもこの間であつた。駅といつても水が出るだけで、土着の民家が十数軒散在するだけの所もあつた。その水を分けてもらうには有料であつた。

ソ連の機関車は日本のより数倍大きく見えた。しかも機関車は水炭車にいたるまで、冷却装置に覆われているので、余けいに大きく見えるし、煙突から水蒸気を逃がさないので発車のときにポッポという音をたてない。また貨車は小型で三十屯積、大型なら六十屯積みである。この大きな列車が曠野を走るのは荘観であつた。貨車の側面一ぱいに赤旗をはりつけ、その真中に大きなスターリン像を飾っているのが指揮車であつた。

貨車列車であるから途中で三時間位停つて

いることがよくあつた。そんなときは、一同は下車して「赤ハタ」等の合唱をするなり、オルグ団の話を聞かされた。

私といえども共産主義に賛成する者があつても決して悪いと思つていない。だからソ連を讚美し、ソ連軍隊の偉容を謳歌するのも止むを得ないと思つた。しかしソ連が参戦して日本を敗かしたことを感謝しろという議論には納得がゆかなかつた。少なくともソ連人と直接会い、ソ連を見た私たちであり、苦しい作業を強いられてきた私たちにソ連を感謝しろということは無理でなかつたろうか。

おどり上るような貨車の中段にねる旅も次第に慣れてきた。しかし景色ばかり眺めて暮すことは許されなかつた。列車内での説得が始つたからである。一人残らず共産主義者にするのがオルグ団の任務であつた。従つてあくまで反動で通すものは列車から降ろすということであつた。私は覚悟をきめてその日の来るのを待った。出発後十日程してから、命令が来て、私にオルグ団の車まで来るようにとの命令を伝えた。

太子と十七条憲法

聖徳太子といえはすぐ十七条憲法を思い出す程に有名である。しかしこの十七条憲法は上宮家の家訓として側近だけに伝わったものであつて、公布されなかつたことはもちろんその一條条すら実行されなかつた。

憲法の各条をよくみれば、それは氏族制を根底から否定する思想を含んでいる。またこれは一種の道德訓であつて、もしこれが実行されたとすれば、少なくとも蘇我を初め当時の社会制度は革命された筈である。たとへば第一条にしても、そのまま受けとれば、蘇我党の否定となる。党派を基礎とする政治を否定し、一種の哲人政治を太子は夢みていたと思われる。

しかしこの理想主義は、もしかりに憲法として公布されたとしても、ただそういうものとして敬遠された形跡がある。憲法が公布され、現実に少しでも政治的変革力があつたとしたなら、蘇我党にとっては大脅威となつた筈である。このように見れば、憲法は蘇我に對する一種の抵抗であり、不穩文書というこ

とになる。憲法がいかに家訓であつたにしても、上宮一家の側近では、政治変革を考えていたと思われる。何故なら後になつて、太子御一族がことごとく入鹿によつて亡ぼされたということが、この憲法のもつ政治変革力に起因したといえないことはない。

聖徳太子は十七条憲法を制定され、しかも現実には馬子のわが世の春をうたっている有様をみたとき、深い孤独を感じたことであつたろう。斑鳩宮を造営した頃から、太子は次第に政治面から後退して行つた。太子は摂政の位置にありながら、十数軒離れた飛鳥には馬子が実権を握つていた。

太子は晩年になるにつれて、政治への関心が薄くなり、それだけ思索の時間が多くなつて行つた。太子は皇族であり、摂政という位置にありながら、現実には空虚であり、否定的な考えが強くなつた。太子は在俗の居士として世俗に身を埋めながら法を説くという態度を持したが、こうした自由を得るには、摂政皇族という身分を不適當と考へた。

ここにおいて太子は、孤独であつた。すべてある思想を押し通すには、何らかの犠牲を

実生活にもたらす。たとへ救済の思想であつても、人はかえつて苦惱を増す。大乘思想は徹底した自己否定を促したと考えられる。王侯貴族がかかる思想に接するということは一つの悲劇であつたろう。少なくとも身を全うすることができなかつた。聖武天皇は天皇の位置を自ら否定して出家した。そして晩年には藤原家の圧迫の下に薬師寺に幽居した。太子の場合は一族全滅という悲惨事を招いて鋭敏な太子が、かかる運命を予感しなかつた筈はないと思われる。

太子薨去後、太子の長子山背大兄王の一族は入鹿のために襲撃された。その時に王は、「われ兵を起して入鹿を伐たば必ず勝つであらう。然るに一身の故に百姓を傷りそこなうことを欲せず」といわれ、父太子の信念に殉じて、法隆寺において自害された。

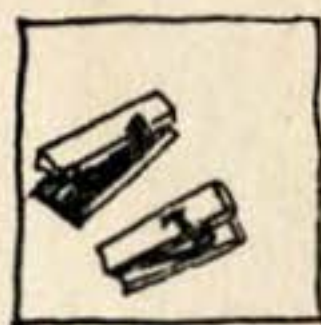
太子一族が入鹿に追われたとき、側近は当然入鹿と戦うことを主張する者が多かつた。山背大兄王も恐らくは心が動いたに相違ないが、結局は自らの身を亡ぼして戦いを避けられた。その理由が一族という個人のために、一般人を傷けたくないというのであつた。

選択集私解——その十

聖典
講義

サ
シ
ミ
念
仏

竹 中 信 常



一、タテの念仏

ものにはすべて「ウラとオモテ」があり、同時にまた「ヨコとタテ」とがある。タテばかりみたいに細長い東京タワーにも、やはりヨコはばはあるし、ヨコばかりのようにみえる間口のひろい東京駅にも、奥行きのタテはある。ものごとはすべて、ヨコとタテの釣合いから出来ていて、その釣合いいかんによっていろいろの形や面白みが出て来るのである。お念仏もまた同じことで、やはりタテとヨコとがある。ヨコの念仏というのは、ある時代、ある社会に、ひろく行われる念仏をいうのであって、宗祖の時代、全国津々浦々までひろまった念仏の弘通(ぐづう)を意味する。すこしくむづかしくいうならば「念仏の平面的・空間的側面」をさすわけである。同時にまたそれは、本稿がこれま

で述べて来た念仏の姿でもあるのである。

ところが、今回は他の側面、ここでいう「タテの念仏」について考えてみる段になったのである。タテの念仏というのは「念仏の立体的・時間的側面」のことである。いくらありがたい念仏でも、夜空の花火のように一時にパッとひろまって、そのまますーと消えてしまったのでは、何の値うちもない。ひろまった瞬間に丁度おりよく出会った人は、ああありがたいと思うだろうが、その後の人々は一体どうなるのだろうか。念仏のありがたさを知らずにこの人生をすごさねばならないことになる。全国すみずみまでひろがるような価値のある念仏ならば、どうして、そのままに消えてしまうわけがあるうはずはない。ことに人の世というものは時代が経つにつれて、段々に諸事が深刻になり、世相は邪悪に傾くものなのである。そうした時の流れ

の末にこそ、念仏の価うちはますます發揮されるべきではないだろうか。普通、凡愚のわたくしどもでさえこう考えるのだから、賢明ならびなきお釈迦さまがこのことにころづかないはずはない。第十二章段に

「釈尊定散の諸行を付属したまわず、唯念仏をもって阿難に付属したまうの文」

が説かれているのは、まさにこの予想にこたえられたものである。

ところで徹選択本願念仏集という本を書いた聖光上人は「師のいわく、こはこれ至極最要の文也」といって、選択集の中でもこの第十二章段が一番重要なものだとしている。また、見方によるとこの或る文こそが善導大師の真意を伝え、宗祖が浄土宗を開くときのもととなったともいわれている。こうした大層重大な章段にさしかかって来たので、他の章段のように、経論を引用することはあまりせず、もっぱら宗祖御自身の「私釈」（お考え）をそのままに述べられているのである。

それなら、そのように重要な意味とは一体どんなことか。タテの念仏とは何だということになる。それは、先にかかげた章題の文のとおりで、観經の末尾において釈尊は阿難に対して「念仏だけをたもて」とお命じになったから

である。少しく本文を引用するならば

「観無量寿經にのたまわく、仏阿難に告げたまわく、汝よくこの語を持（たも）て。この語をたもてとは、即ちこれ無量寿仏の名をたもてとなり。」

同經疏（善導の観經疏）にいわく、仏阿難に告げたまわく、汝よくこの語をたもてより以下は、正しく弥陀の名号を付属して、遐代（かだい——はるかあのちの世）に流通することをあかす。上来定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、こころ衆生をして一向にもっぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり」

弥陀の名号をとなえること、このことをはるかあの世にまで伝える。このことを釈尊は阿難に命じられた。それまでは念仏のヨコの功德について語られて来たのであるが、ここに至って、タテに未来永劫に至るまで、念仏が流通すべきであることを説かれたのである。いってみれば、ここで始めて、ヨコとタテとがそろった「完全な念仏」ということが出来るようになったのである。それだからこそ、宗祖はここに浄土開宗のもとを見出されたのである。大切なことゆえ、くりかえしていうと、

「いままで定善・散善の二つの修行の門を説いて来たが、ひとたび弥陀の本願ということのうえからふりかえっ

てみるならば、その真意は、多くの人々にひたすらに弥陀仏の名をとえさすことにあることが知られるのである」
多くの人々とは、いうまでもなく未来永劫つきることなくこの世に生れ出るわれわれ凡夫であり、それ故に、念仏もまた永遠に伝えられねばならぬのである。

二、正副保証人

釈尊はなぜ「念仏」だけを伝えて、他のもの——ここでは定善・散善の二門——を伝えられなかったのか。

定善・散善というのは、観経にとかれてある十六とおりの観法のうち、前の十三を定善、後の三を散善という。

「観法というのは、ごく簡単にいうと、無念無想の平静な清らかな心になるため、なにか一つのものにおもいをこらすことをいうので、そのために、十三とおりの思念の対象を次々に述べているのである。たとえば太陽におもいをこらす日想観、水におもいをこらす水想観、仏のからだにおもいをこらす仏身観などである。そしてこれらはすべておもいを一つにこめるという意味で「定」である。次に散善というのは、上、中、下の三とおりの往生人のことをおもい、これを思念することである。上輩の者は立派にむずかしい修行に耐えて往生するもの。中輩は仏のいましめを守

り、人間として世間なみのよいことをして往生するもの。下輩の者は仏のおしえもおこなわず、いましめも守らず、色々の罪惡を犯しても、なお臨終に当って一声の念仏をとなえることによって、往生することの出来る者。われわれ一般の凡人はすべてこの下輩の下に当るが、そうしたものでも、念仏さえすれば往生することが出来るという。このありがたいおしえを心に刻みこむことが散善である。

ところが「わたくしにいわく、疏の文を案ずるに二行ある。一には定散、二には念仏なり」と述べられている。観経疏にはこうして定散二門を説いているが、同時にまた念仏を説いている。では念仏というのは一体何か。

「次に、念仏とは、専ら弥陀仏の名を称するなり。念仏の義常の如し」

とあって、ここでいう念仏とは、口でナムアマミダブツと一生懸命にとなえることを意味する。ほかのことはしなくとも「もっぱら称名念仏さえすればよいというのである」

「しかるに、今まさしく弥陀の名号を付属して廻代（かだい）に流通することをあかすというは、およそこの経の中に、すでにひろく定散の諸行を説くといえども、即ち定散をもって阿難に付属して、後世に流通せしめず。唯念仏三昧の一行をもって、即ち阿難に付属して、廻代に流通せ

しむるなり」

その理由は

「……すでに仏の本願に望むるに、こころ衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにありという。定散の諸行は本願にあらず、ゆえにこれを付属せず。またその中に

おいて、観仏三昧は殊勝の行なりといえども、仏の本願にあらず。故に付属せず。念仏三昧は、これ仏の本願なり。故にもって付属す……。」であって、念仏三昧はアミダ仏の本願——お約束——だからまちがいないので、これだけをのちの世の凡下悪人のために伝えるのである。いくらす

上人の御誕生

法然上人は長承二年（西紀一一三三）四月七日に岡山県南条郡稲岡に生誕されました。

ご伝の作者は次のように語っています。

長承元年の七月上旬のこと、上人の母である奏氏は剃刀を飲む夢を見たので、夫である漆間時国に、そのことを話しました。すると時国は大変に喜び、

「それは必ず男子が生れる証であろう。そして将来は、子供が成長して出家し、学道にはげんで仏法の棟梁となるであろう。多くの衆生を教化するという瑞相に違いない」

それというのも時国夫妻は、子供のないことを嘆いて、どうか孝子がさすかるように心を合せて神仏に祈っていたからです。そのかいあって瑞相にめぐまれて懐妊したのを非常

に喜びました。奏氏は胎内の子供が満足に育つてくれることばかり願ひ、気持は一層柔和

に喜びました。奏氏は胎内の子供が満足に育たので、この地に寺を建てたのが誕生寺であ

にし、深く三宝に帰依して暮しました。奏氏は懐妊中に何んの苦痛もなく元気で暮すことができ、これも神仏のおかげで授ったことだと感謝していました。

上人は四、五才になると、坐るときには西の方に向って坐ることが多くありました。遊んでいても口によく南無阿弥陀仏と唱えるのでした。また生れながら利潑な上人は、すでに成人のようであったと申します。

ようやく月が満ちて、四月七日正午に上人は誕生しました。奏氏は初産にかかわらずお産は軽くすみしました。その時紫雲が棚引きました。また館には大きく茂り、二またになった椋の木がありました。その椋の木の枝にどこからかとんできた白幡が二流かかりました。幡の鈴がしきりと心よい響をたてていたのに、七日目に白幡は天の方にとび去ってしまいました。それ以来、この木を両幡の椋の木と呼びました。何年かたって、この椋の木は傾き倒れたものの長く芳しい香が薫じてい

保延七年（一一四一）二月に源内武者定明のために父時国が夜討にあい、上人九つにして父を亡くすまでは、幸せな生活を送っていました。しかし幼くして父が討れる等の非常な事件から始まり、上人ご一生の時代は全く戦乱の時代でした。上人二十四才の時に保元の乱があり、次いで平治の乱が起りました。平家全盛時代も夢の如くに過ぎて、木曾義仲の京都乱入、鎌倉幕府の開設とめまぐるしく時代が移ってゆきました。

ぐれていても、お約束のないものは伝えても無駄であるというのである。

では、どうして、伝えなくてもよいよけいな定散二善とか観仏三昧とかをもっともらしく説明してあるのかというと、

「定散を説くことは、念仏の余善に超過することをあらわさんがためなり。もし定散なくんば、なんぞ念仏ひとり秀で（ひいで）たることをあらわさん。……故にいま、

定散は廃のためにとき、念仏三昧は立のためにしかも説く」つまり、念仏というサシミをおいしくするためのツマが定散二善その他なのである。ツマだぞといわれた旧仏教の連中のおこったのはムリのないことだが、反面、それだけのことをズバリいい切られた宗祖の不動の念仏信仰には無条件で頭がさがる。

こうした不動の信仰は、どこから出て来たのか。その裏うちは何か。ただ何となくそう信ずるのだといった、あまっちょろい感傷からでは、これだけ大たんな、それまでの古い仏教全体をむこうにまわしての大ミエは切れるものではない。宗祖には、もう断言するだけの裏づけ——保証人——を持っていたのである。しかもその保証人は一人ならず、二人もいるのである。その一人は阿弥陀仏であ

り、もう一人は釈尊なのである。この超大物の二人が正副保証人なのだから、宗祖の鼻息の強いのはあたりまえである。何を保証してくれたのか。

阿弥陀仏は、その第十八願で、念仏衆生は必らず救いてやるぞと保証され、釈尊は未来永劫念仏だけを伝えることを保証されたのである。

この正副保証人をみつけたのは善導大師だったが、その保証の真価発揮されたのは宗祖だったのである。

三、まさに、タイムリー

中国の格言に「天の時、地の利、人の和」というのがある。ものがうまくゆくには、時機と条件とお互いの理解が必要だというのである。その中でも「時機」ということが一番大切で「出おくれたお化」のように時機をはずすと、引こみがつかなくなってしまう。仏教の教えでも同じことで、どんなにすぐれた教えでも、うまいチャンスをつかまなければ、それは決してうけ入れられもせず、ひろまりもしないのである。宗祖が、弥陀の本願念仏をあのよう

にひろめられたのも、まさに、タイムリーだったからである。源平のあらそいを頂点として、乱れた当時の世相では、むずかしい修業などすべくも出来ず、荒れに荒れた民

衆の心情には、甚深微妙の法などは響きようもなかったのである。念仏一本。「とに角、となえなさい」これだけが精一杯だったのである。迫り来る猛火に追われて逃げまどう当時の民衆にとっては「とに角、こっちへこい」とさしのべられた「念仏の手」。これにつかまるのがやっとだった。このチャンスをはがしては、永劫に救われぬという。まさに危機一発のタイムリーだったのである。

宗祖は、こうした念仏のタイムリーを、次の如くに述べておられる。

「ゆえに知りんぬ。諸行は機にあらず、時を失えり。念仏往生は、機に当り、時を得たり。感応あに唐捐（とうえん）ならんや。まさに知るべし。随他の前には、しばらく定散の二門を開くといえども、随自の後には、かえって定散の門を閉ず。一たび開いて以後、永く閉じざるは、唯これ念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、こころここにあり、行者まさに知るべし。またこの中に、遐代とは、雙卷経のこころによるに、遠く末法万年の後の百歳の時を指すなり。これすなわち遐（とおき）をあげて、ちかきを摂するなり。しかればすなわち法滅の後、なおもてしかり。いかにいわんや末法をや。末法すでにしかり。いかにいわんや正法像法をや。故に知りんぬ。念仏往生の道は、

正、像、末の三時、及び法滅百歳の時に通ずることを」蛇足ながら、この文の大意を述べようならば、念仏だけを伝える理由とはこうなのである。念仏以外のもろもろの修行は当代の人にはふさわしくなく、時期がズレてしまっている。これに対して、念仏往生のおしえは、当代の人々の心にピッタリとして、まさに好機である。こうして、おしえと人と時期とがピッタリしているチャンスを、どうしてムダにすることが出来ようか。（感応あに唐捐ならんや）仏が特定の相手の要求に応じて説法される場合（随他の前）には、定散二門といったむずかしいことをいい出されてもよいが、特定の相手でなしに、ひろく一般大衆のために、仏がみずからの意志で説法される場合（随自の後）には、定散のようなむずかしい法門はやめてしまわれ、以後永く開かれてゆくには念仏門でしかない。アミダ仏の本願も、釈尊が伝えよといわれたのも、この意味であり、念仏門こそ永久に、末代下根の凡夫に適するからなのである。かだといふのは末法万年の末の末までという意味で、それ程遠い将来でも念仏は衆生をすくうのだから、それ以前ならばなおのことである。こういうわけだから、念仏往生のおしえは、近い将来も、遠い未来も、すべてに通じ、永劫に滅することがないであろう。

（文学博士）

表紙の写真

お釈迦様でも

誕生仏 奈良東大寺

奈良といえば、近頃はディズニランドでもちきりのようであるが、やはり一般の人は古都にふさわしい夢をいただき、落ちつきのある寺町を連想するであろう。そしてすぐさま大仏様を思い出すであろう。表紙の誕生仏は有名な東大寺の大仏殿の前で行われる灌仏会のものである。

ブロンズの像というのはどことなく冷たさを感じるものであるが、この像には少しもそんなところがない。まんまるい顔にすっとした美しい眉、中半閉じかけんの目とぶっくりふくれた頬、そして小さな口元、顔全体にはほえみが充満している。しかもその中に何ともいえない品といおうか、賢さを求めるのは私の主観であろうか。



まるまると太った全軀は、どの部分をとって見ても子供らしきにあふれているが、腕や

腹の大きなくびれは、とりわけ可愛さを惜みなく表現している。そればかりではなく、この像全軀には何の欲もなく、バァーとあやせばニコニコと笑う子供の明るさと清純さがあふれているのである。誕生仏は沢山あるけれども、こんなにすばらしい誕生仏は他にないであろう。そして問わず語りに天平彫刻のおおらかさを物語っているものでもあろう。

まるい桶の中に立った真黒なお釈迦さまに小さな柄杓で甘茶をかける灌仏会は、子供心にもママゴト遊びとは一風変わった幼い日のなつかしい思い出が残っている。しかし生れるとすぐ七歩歩いて、右の手を天に、左の手を地に指しながら「天上天下唯我独尊」といったという伝説には、だんだん反発心を起し、疑いをいだくに相違ない。牛や山羊の子ではあるまいし、生れたばかりの赤ん坊が独りで歩くはずもないし、ましてこのような言葉をいうはずがない。けれども成長するにつれてこの疑問も解消し、釈迦の偉大さをたたえるものということがわかり、一段と感慨深さがわいてくることであろう。

四月八日の花祭りより一足先きに「釈迦」

という日本最初の七〇ミリ映画ができ、大きな話題をまいた。釈迦ぐらい人間らしい生活をした人はないのに、二千五百年の年月はまるで神聖視した人間像を築き上げてしまった。これは古代社会に理想を求める東洋思想がもたらした結果であるが事実はその反対の思想もはたらいてくるのである。そしてこの二つが互いにかみ合って発展してくるのである。そこに今度の悲劇が生れてきたのである。しかし、この映画に対する賛否両論の対立は、かえって興行成績をあおりたてる結果になったのは面白い。社会を昂奮させ、その裏の心理をつかんだ宣伝効果が結果的には成功したといって過言ではあるまい。

昨今もプライバシーで問題になった小説がある。この場合も多くの仏教人が抗議を申し込んだけれども、要は興行的なものに左右されなだけの信念を植えつける教化を忘れてはならない。春爛漫の桜花の下で行う灌仏会は今年も例年通り、行われるであろうが、お釈迦さまはこんなことはご存じなく、ほほえみ続けるであろう。

(鈴木成元)

はなまつり用品

はなまつりのしおり

〒十五円

五色刷 B 6 版五枚綴

リボン付のかわいい施本

三〇部より単価十五円送料サービス
百部より 〃 十三円 〃

— みほとけのおしえ —

よいこのいっしゅうかん

〒三十円

花祭り／入園式／卒業記念の施本に好評
百部より貴名・行事記念名の印刷および
送料をサービスいたします

◇見本のお申込みは郵券でおはやめに◇

発行所 東京都千代田区 飯田町 2 の 8 大 道 社 振替・東京 8 2 4 7
TEL <332> 5944

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価 格 100 円 送料実費

(10部以上割引あり)

美麗 2 色刷 32枚綴 上質紙使用

法要その他の記念品に最適 (箱入・寺名等刷込の相談に応じます)

申込先 東京都千代田区 飯田町 2 の 8 法然上人鑽仰会 振替 東京 82187
電話 (332) 5944

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄 土 四 月 号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年三月廿五日 印刷

昭和三十七年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

大正大学

学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成することを目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和37年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）
試験期日 3月27日・28日（火・水）詳細は入学案内を参照のこと



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式
会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪 041 8847番 本社工場 高岡市横田

梵鐘 (45cm~85cm) 在庫豊富
喚鐘 (12cm~51cm)
音響理學博士青木一郎先生
梵鐘界の權威 日展參事香取正彦先生
芸術院賞受賞